「黒地の絵」―松本清張のダイナミズム―
評伝松本清張：昭和33年[1]

加　島　　巧

Matsumoto Seicho's *Kuroji-no-E*
His Origin of Dynamism
A Critical Biography of Matsumoto Seicho, 1958

KASHIMA Takumi

Abstract

In first half of 1958, Matsumoto Seicho wrote four short novels. They were based on an event that actually happened. *Kuroji-no-E, Tatoo on the Black Soldier's Breast,* is one of them and is based on a massive breakout of more than 200 African-American soldiers from Camp Jono, which happened on July 10, 1950. Some of them broke into houses, stole beer, and committed excesses. Matsumoto Seicho lived near Camp Jono at that time but when he moved to Tokyo in 1953, nobody knew about these events. Therefore, he made up his mind to write a novel based on the facts. To show his competence as a novelist, I tried to collect as much evidence as possible both in Japan and in America so that readers would reappraise Matsumoto Seicho.

１．昭和33年（1958年）

昭和33年の前半に松本清張は４つの作品を書く。「黒地の絵」を『新潮』３月号、４月号に、「ある小官僚の抹殺」を『別冊文藝春秋』第62号（２月28日）に、「日光中宮祠事件」を『週刊朝日別冊 新緑特別読物号』（４月15日）に、そして５月、「額と歯」を『週刊朝日奉仕版』（５月14日）に掲載する。これらの４編が事実に基づいた作品であることは、松本清張自身も語っている。このような作品には、素材として利用した事実に現実感があり、その迫真力には小説家の想像力が追いつかない場合があるとも述べている。[2]

「黒地の絵」は、昭和25年７月10日に小倉で起こった黒人兵集団脱走事件がモチーフとなっている。「ある小官僚の抹殺」は昭和28年に起こった砂糖疑獄を題材にしているが、この事件は農林省課長の自殺により迷宮入りとなった。松本清張は『点と線』（昭和33年）や『中央流沙』（昭和43年）でも官僚の腐敗を描く。さらに、「波の塔」、「濁った陽」、「現代官僚論」、「不在宴会」[3]でもさまざまな官僚の姿が描かれている。「歪んだ複写」[4]では税務署職員の不正を書いた。「日光中宮祠事件」のモチーフとなったものは、1946年に栃木県日光市中宮祠の旅館で起こった殺人事件である。旅館の焼け跡から経営者一家６人の焼死体が見つかる。他殺を思わせる痕跡があったにも関わらず、警察は無理心中とし、捜査を打ち切ってしまった。1955年に埼玉県で逮捕された強盗犯人の供述の中に中宮祠の件があったために再調査をすると、二人の犯人が判明し、逮捕されたのである。事件の真相は二人の宿泊客が盗みを行っている所を発見されたために家族を刺殺し、放火をして逃亡したものであった。「額

と歯」のモチーフとなった事件は昭和７年３月に遡る。当時、東京市南葛飾郡寺島町玉ノ井に売春街があり、[5]そこの通称「お歯黒ドブ」と呼ばれる下水溝に３つのハトロン紙に包まれた男の胸部、首、腰部が浮いているのが発見された。捜査は難航したが、犯人は被害者の妻の兄と弟であった。「バラバラ殺人」という呼称が最初に使われた事件である。

２．昭和32年（1957年）

松本清張が昭和25年７月に小倉で起こった黒人兵集団脱走事件の取材のために小倉を訪れたのは、昭和32年の秋であった。取材先は小倉署員やMRA（米軍戦死体収容所）に勤務していた日本人である。夜には、宿泊先の旅館に北九州の文学青年グループの５、６人がこの事件をテーマにして作品を書く構想があるので、執筆を中止するようにとの申し出もあった。松本清張は拒絶する。[6]「黒地の絵」を書いた理由は、昭和28年に上京したとき、事件のことを東京の人が全く知らなかったことにあった。[7]小倉でさえ新聞には小倉キャンプの司令官が遺憾の意を表しただけで、[8]事件の詳しい報道は一切されなかった。[9]

昭和32年（1957年）５月14日（火）付の北九州日日新聞に、「報道を禁じた駐留軍犯罪＝小倉キャンプ黒人部隊の反乱事件＝」という記事が掲載された。[10]この年の秋に松本清張は小倉に来るのであるが、この新聞記事を目にしたことは十分に予想される。この新聞記事には次のような描写が含まれているからだ。四か所引用する。「黒地の絵」の描写を（　）内に示す。

⑴　昭和二十五年七月十一日午後六時十分過。小倉の名物“祇園太鼓”のバチの音が夕空に映えるころ、自動小銃、手りゅう弾等完全武装に身を固めた、二十五師団二十四連隊の黒人兵約二百五十名が城野キャンプの壁を越えて夕暗の街にながれいで、或は数十名一団となつて正門から堂々と脱出した。

（黒人兵たちは五、六人が一組だったりした。統一はなかった。白人兵は一人もいずに、黒人兵の将校もまじっていた。彼等は兵営の西南部の広い地域にかけて、数々の村落に散った。自動小銃をにない、手榴弾を背負った兵士の群れは、どれくらいの組に分かれていたか見当がつかなかった。誰が誘い誰が誘われたということでもなさそうだった。彼等は一組ずつの単位で行動していたが、組と組の間は連絡もなく、命令者もなく、ばらばらであった。云えそうなことは、彼らが戦争に向う恐怖と魔術的な祈りと、総勢二百五十人の数が統率者であったことだった。[11]）

（昭和二十五年七月十一日の夜の、小倉キャンプに起こった黒人兵たちの集団脱走と暴行の正確な経緯を知ることは誰も困難である。記録はほとんど破棄された。

しかし、彼らが二十五師団二十四連隊の黒人兵であったことはたしかであった。二百五十名はその概数である。[12]）

⑵　一説には脱走は突発的なものではあつたが数名の将校が指揮したといわれ、また街の夜空に打ちならす“祇園太鼓”のバチ音にアフリカ土人、インデイアン時代の地を湧き立たせ一層の郷愁を駆り立てたともいわれているが、この事は事件の前日キャンプ司令官が市当局に太鼓を鳴らすのを遠慮してくれと申し入れがあつた事からもうなずけよう。

（もともと、アメリカ奥地で鳴らす未開人の太鼓には、儀式の祈りがある。彼らの祖先がアメ

リカ植民地開拓の労働力として連れてこられたとき、白人から教えられた神の恵みに感激し、奴隷の束縛された生活のうちに光明を見出して創造した黒人霊歌にも、アフリカ原始音楽のリズムが、神とは別な、呪術的な祈りのリズムが流れて潜んでいる。[13])

（なぜそれが不運か、あるいは、危険かは、日本人にはわからなかったが、さすがに小倉MP司令官モーガン大佐はその危惧を解していた。彼は市当局にたいして、祭典に太鼓をならすのはなるべく遠慮してほしいと申し入れた。[14])

⑶　鎮圧部隊の打ち上げる照明弾が夜空を照らし、両軍の射ち出す機関銃、自動小銃の弾曳は赤く尾を曳き、銃声は遠く南小倉、キャンプ小倉内方面にまで響いた。

（このとき北の空が輝いた。

「照明弾だ」

と、警官が叫んだ。

「おもしろい。やれやれ、やってくれ。ああ、野戦に行った時を思いだすなあ」

銃声が、散発的に、別な方角でも起った。留吉は、はじめて、さっきからの花火の正体を知った。）[15]

⑷　午後七時から十二時まで付近の交通機関は一斉にストップされ、小倉の夜の街には不気味な沈黙と恐怖の最中に機銃の音だけが間断なく響き、夜の更けると共に三郎丸、城野方面の民家から被害の情報が続々と入り正式に小倉署に届けられたものだけでも七十八件に及んだ。

（夜のふけるとともに、城野方面の民家からの被害の情報が次々にはいり、正式に小倉署に届けられたものだけでも七十八件に達した。いずれも暴行、強盗、脅迫の申立てだったが、表面に出さない婦女暴行の件数は不明である。）[16]

3．占領下の検閲、昭和36年（1961年）、昭和31年（1956年）

松本清張は昭和36年１月に小説「金環食」を『小説中央公論　冬季号』（１月１日）に書く。この中で、松本清張は占領下の日本の検閲を描いた。

昭和23年３月のことである。[17]新聞記者石内は東京から５日かけて稚内に着いた。さらにそこから小舟でＲ島へ向かった。Ｒ島では金環食の観測が行われる。日本観測陣の他に、日米共同観測陣地が設定されていた。しかし、この二つの観測陣地は600メートル離れていた。食帯の幅が1,200メートルあったので、日本観測陣地が食帯の中心ならば、日米共同観測陣地は食帯の縁にあたる。観測から２カ月後に報告会があった。石内は記事を書いたが、翌日の新聞を見て、石内は眼を瞠った。見出しが「日本日食観測陣の勝利」となっていたからだ。

石内はGHQから呼び出される。スミス主任は取り消し記事を出すように求める。石内の記事はアメリカの科学陣を批判していると判断されたのである。「日本は敗戦国である。敗戦国のくせに戦勝国の科学を批判するとは、もってのほかである」[18]とスミス主任の言葉を石内に伝えたのは唇のうすい日本人の通訳だった。

昭和31年に松本清張が『週刊朝日別冊』（12月）に書いた短篇小説に「通訳」[19]というものがある。八代将軍吉宗の世継となる長男家重はひどいどもりあった。家重の言葉を理解し、それを家臣に伝える通訳として大岡忠光が側用人となった。しかし・・・。この短篇を書いた動機を作者は次のように

述べているが、そこからは、新聞記者石内にスミス主任の言葉を伝える日本人通訳の姿を垣間見る思いである。

「通訳」はたしか『小説公園』に書いたと思っている。材料は江戸の中期に取っているが、実際はアメリカ占領時代の日本の一面を書いてみたかったのである。占領政策、ことに初期のそれは一種の通訳政治ともいえる。最高権力者は政府でもなければ警察でもなく、日本人の通訳であった。たんに東京だけでなく、地方都市に置かれた軍政部やCICにおける通訳の権威には、市町村長も警察署長も頭が上がらなかったのは、マーク・ゲインが「ニッポン日記」に書いているとおりである。[20]

ただし、松本清張がマーク・ゲインの著作のどの部分を指しているのかは、確認できていない。[21]

GHQは1945年9月21日付でSCAPIN-33[22]（連合軍最高司令部訓令第33号）を出し、プレスコードを出し、出版物の検閲を始める。プレスコードは10項目から成っていた。

1．報道は絶対に真実に即すること
2．直接又は間接に公安を害するようなものを掲載してはならない
3．連合国に関し虚偽的又は破壊的批評を加えてはならない
4．連合国進駐軍に関し破壊的に批評したり、又は軍に対し不信又は憤激を招くような記事は一切掲載してはならない
5．連合軍軍隊の動向に関し、公式に発表解禁となるまでその事項を掲載し又は論議してはならない
6．報道記事は事実に即し、筆者の意見は一切加えてはならない
7．報道記事は宣伝目的の色を着けてはならない
8．宣伝の強化拡大のために報道記事中の些細な事項を強調してはならない
9．報道記事は関係事項や細目を省略する事で内容を歪曲してはならない
10．新聞の編輯に当り、何らかの宣伝方針を確立し若しくは発展させる為の目的で、記事を不当に軽く扱ってはならない

朝日新聞の社外秘の文書によれば、次の4項目は記事に出来ないとの認識が社内にはあった、と1995年3月11日付の朝刊にはある。[23]

1．連合国の対日方針不一致を暴露するもの
2．日本の過去の戦争を正当なりとする言説
3．わが国を神の国なりとする言説
4．米兵の暴行事件（事実の有無を問わず不可）

検閲はG－2（参謀2部）の元、民間検閲支隊によって行なわれた。1949年（昭和24年）10月に廃止されるとは言え、このような状態は昭和27年（1952年）4月28日サンフランシスコ講和条約発効に

より失効するまで続いたのではないか。黒人兵集団脱走事件もまさに、このような時代に発生した事件だった。

4．ディーン少将のこと、昭和25年（1950年）～28年（1953年）

「黒地の絵」は二つの部分に分けられるが、その両方とも冒頭は朝鮮戦争に関する電文が配置され、その後に前半では前野留吉・芳子と脱走してきた黒人兵についての描写、後半では、AGRS に勤務する香坂歯科医と前野留吉が描かれている。ディーン少佐については、前半で２回触れられているにすぎない。七月二日付の総司令部の発表と小倉 MP 司令官が市当局へ祭りの太鼓を止めるように要請する場面である。

（総司令部二日午後八時五十分発表）第二十四歩兵師団長ウィリアム・ディーン少将は朝鮮派遣全米軍の総司令官に任ぜられた。[24]）

（司令官は渋い顔をして、とにかく、太鼓の音は迷惑だと主張した。市当局は云った。それはどういうわけか。当地駐留師団長のディーン少将が朝鮮軍指揮官として渡鮮して留守であるから、その遠慮のためか。それとも、北鮮共産軍のために米軍が南鮮に圧迫されつつある現在の戦況にたいして、自粛のために太鼓の音をやめよと命令されるのか、ときいた。大佐は首を振って理由がそうではないことを示した。[25]）

ウィリアム・ディーン（1899－1981）は1947年10月小倉に着任する。朝鮮戦争の勃発する前日、1950年６月24日の土曜日の夜には、仮装パーティに出席していた。自伝、*General Dean's Story* から引用する。この時、ディーン少将は身長180センチ、体重は93キロであった。

At Kokura, on June 24, 1950, the officers of the 24th Division headquarters staged a costume party. I am slightly more than six feet tall, and that summer I weighed two hundred and ten pounds. The black stovepipe hat of a Korean gentleman sat foolishly high on my head, and the long robes proper to a yang-ban flopped somewhere around my knees. My wife came dressed as a well-born Korean lady, and our double costume was a considerable success.[26]

朝鮮戦争は６月25日（日）に勃発するのだが、『旅の子アダム』でニューベリー賞を受賞した作家であるエリザベスＧ．バイニング夫人（Elizabeth Gray Vining, 1902-1999）は今上天皇の家庭教師として東京にいた。彼女の文章からは緊迫感が漂ってくる。３カ所引用するが、最初の引用からは、第三次世界大戦の口火を切るのではないかと言う不安が、次の引用からは京城に「侵入」（entered）した北朝鮮軍に対し、しばらくはまだ「わが手中にあった」(holding)にあったものの、「陥落」（fallen）したという刻々と変化する情報が入る様子が、そして最後の引用からは、銀座の街から一夜にして姿を消した米兵と奇妙な戦闘の様子（通勤戦闘）が読み取れる。

We FIRST READ about the Korean War in the morning paper on Monday, June 26, 1950.

The headlines, when I saw them, gave me the same sick feeling of disaster as those other

headlines down the ominous years: Japan's attack on Manchuria, Hitler's march into the Rhineland, Mussolini's war on Ethiopia, the terms of the Munich settlement. I wondered at once if this was the spark that would set off a third world war.[27]

The next day Seoul was reported as "entered" before I went to the Palace for the Empress's lesson, "holding" when Prince Mikasa came to my house for his lesson, and after the party which I gave for Princess Takako, "fallen."[28]

Events moved swiftly those first days. The American enlisted men whom we had seen drifting about the Ginza disappeared overnight. The PX one day was full of naval fliers, most of them incredibly young-looking and very sober, who disappeared in their turn. Planes were overhead constantly and Army people began to say that this was the strangest war they had ever known, fought by commuters who left in the morning, fought all day, and came home for dinner at night.[29]

民俗学者宮本常一（1907－1981）も、昭和25年６月25日は東京にいた。宮本が所属する日本民族学協会は他の七つの団体[30]と共同でフィールド調査を長崎県の対馬で行う計画を立てていた。６月25日はその打ち合わせが東大で行われていたのである。その日は朝鮮戦争が勃発した日であり、朝鮮半島からわずか50キロしか離れていない対馬は戦場の目と鼻の先にあるのだ。宮本常一の回想を引用する。

翌25日東大へ行った。東京から参加する者はほとんど集まっており、対馬渡島についての打合せがあり、昼までに終わり、つづいて民俗学班だけの集まりがあった。（中略）
さて、東大を出てお茶の水まで歩いてゆく途中、アイスキャンディ屋が「朝鮮に対して宣戦布告か」とひとりごとを言いながら通り過ぎた。石田さんに「何のことでしょう」ときくと「北朝鮮が南朝鮮に対して戦争をしかけたのではないですか」といった。[31]

八学会連合の対馬調査[32]は７月５日（水）に第一陣が対馬の厳原（いずはら）に到着する。宮本常一は７月９日（日）、板付飛行場を飛び立った飛行機の爆音で目を覚まし、船で対馬に向った。宮本は８月19日に対馬を離れ、翌20日には本部が正式に解散した。この調査団には日本人類学会も参加していたが、「対馬住民の形質人類学的研究」という調査を行うメンバーの中に奈良医大の助手古江忠雄がいた。古江忠雄はこの直後、朝鮮戦争と大きく関わることとなる。そして、それは、その後の彼の人生を決めた。
ディーン少将は７月14日から21日にかけてのテジョン（大田）の戦いに臨む。この時バズーカ砲で撃破した北朝鮮軍のＴ－34－85戦車は1977年まで記念碑として展示されていた。この戦いで部隊は撤退するのであるが、ディーン少将は単独での行動を強いられることとなった。８月25日に北朝鮮軍の捕虜になった時には、体重が63キロにまで減っていた。韓国に着任する際に、上野保という日本人をディーン少将は連れていた。日本人が朝鮮戦争と関わったことは、色々な資料が存在し、文学作品でも描かれている。[33]彼とは単独行動の合間に逸れてしまう。ディーン少将は死亡したという記事が８月24日の日本の新聞に流れる。[34]

年が明けて1951年１月９日にトルーマン大統領からディーン少将の夫人に名誉勲章が授与された。その際、少将が行方不明であることも伝えらる。しかし、その年の12月18日、北朝鮮領内に入ったオーストラリア人ジャーナリスト、ウィルフレッド・バーチェット（Wilfred Graham Burchett, 1911-1983）がディーン少将の無事を報じる。[35]そして1953年９月４日に板門店で交換捕虜として釈放される。そのディーン少将は解放直後の９月18に日に小倉にやってくる。その様子を『激動二十年　福岡県の戦後史』から引用する。

生きていたディーン少将

「ハロー、ウィリー」二十八年九月十八日、正午すぎ、まだ鳴りやまぬ拍手を背に歓迎会場を出たウイリアム・Ｆ・ディーン少将（当時五十三才）は、目の前に立った一人の日本人青年を見つけ、抱きすくめるように肩をたたいた。ウイリーこと上野保（同二十三才）とディーンが朝鮮の戦場で離ればなれになって三年ぶりの再会だった。上野はキャンプ・コクラの労務者をしていたが、米軍の中にもぐりこんで朝鮮に渡った。激戦のさなかで送還もできず、そのまま通訳として従軍することになった。二十五年七月二十一日の大田戦線でのこと―。[36]

朝鮮派遣米軍総指揮官ディーンは、数人の部下と大田付近の最前線を視察中、戦車の奇襲をうけた。彼自身、バズーカ砲を手に三台を撃破したが、まもなく北鮮軍第部隊の重囲に落ち、米軍は壊滅的な打撃をうけた。気がついたとき、ディーンの近くには傷ついた兵二人と上野がいた。

四人は泥にまみれ、軍服はさけ身分も人種の違いもなかった。“生きている”－それだけで、お互いに固く手をにぎりかわした。後退。いくつ目かの山の頂上で、その兵がノドのかわきを訴えた。彼はうなずくと谷間に降りていったが、それっきり帰ってこなかった。

行方不明の報は北九州にも伝わり、大きな話題となった。市民に親しまれていたディーン・・・二十四年十月、二十四師団長として小倉に赴任してから、彼のとった態度は勝利者らしからぬ謙虚さと暖かさにあふれていた。二十五年の正月には、北九州、旧五市の知名人を私邸に招いて祝賀会を開いた。何かといえば司令部に呼びつけられ、どなられていた人たち、酒と女を公然と要求する高級将校を扱いなれた知名人たちはびっくりした。

戸畑市では正月に豪華な門松を歴代の米軍司令官にプレゼントしていたが、彼はこれを断り、孤児収容所におくるよう助言した。また、ミルドレッド夫人も将校の夫人たちを動員して、孤児や戦争未亡人のために食料や衣料品などを何回もあつめて回った。

行方不明後一ヶ月たった八月下旬 UP 電が戦死説を流したが、そのひと月後こんどは毎日新聞が生存説を報じた。捕虜の北鮮軍軍医が「北鮮の収容所でディーン少将を診察した」ともらしたと一中尉が芦屋基地で語ったのだ。それは約一年後の二十六年十二月十八日、板門店の休戦会談で交換された捕虜名簿で現実となった。

ディーンは本国への帰国の途中、北九州の米軍、市民の招きで三時間のあわただしい訪問を行った。東京から芦屋へそして小倉へ・・・どこでも歓迎の握手攻め、城野 R&R センター開所式のテープにもハサミをいれた。キャンプ・コクラ内の歓迎会場で約二千人の米将校、日本人を前に「生き残って、こうして皆さんと会えようとは思わなかった。みなさんのことは一生忘れない・・・」声をつまらせ、手をふりながらヘリコプターで去るディーンの胸に、北九州市民の“友情”をこめた花束がしっかりと抱かれていた。[37]

その年、雑誌 *Time* 9月14日号には *Hero's Return* という記事が掲載され、12月7日号の表紙を飾った人物はディーン少将であった。

5．米兵の犯罪、昭和25年（1950年）

昭和25年7月。黒人兵集団脱走事件が起こる直前のことである。ちょうど1週間前の7月4日に事件がおこる。米軍兵が日本人一家四人を殺害する事件が起こる。これについては、松本清張も次のような記録を残している。

> 新聞には決して載らないことだったが、城野のキャンプの外れで黒人兵が日本人一家を斬殺したことがある。夜明けに酔っ払ってキャンプ近くに帰ってきた黒人兵が、戸外で七輪の火を煽いでいる女性に挑みかかった。夏のことで主婦はジュミーズ一枚だった。叫びを聞いて家の中から亭主や男の子たちが出てきた。黒人兵は逆上した。持っていたジャックナイフで女房を殺し、亭主を殺し、男の子二人を斬殺した。たった一人、兄だか弟だかが逃げて助かったということである。
>
> このようなことは口から口に伝えられるだけで、市民は半信半疑だった。だから特別にアメリカ兵を警戒するということもなかった。朝鮮戦争前には聞かれなかった事故である。黒人兵は最前線に投入される要員だった。城野キャンプから一部隊が出動して行けば、どこからか補充部隊が到着する。何日間かいて慌しく出ると、また代りが入ってくる。彼らのほとんどは、朝鮮の南端に追い詰められたアメリカ軍の前線に投入される運命にあった。黒人兵自身は死地に追いやられることがよく分っていたから、自暴自棄になっていたようである。[38]

検閲は1949年10月に廃止されてはいたが、進駐軍に対する遠慮がまだあった。新聞記事にはなっていない。しかし、占領下とは言え、さすがにこの事件の犯人は逮捕され、軍法会議を受けることになる。当時、進駐軍は、Weekly　Summary なるものを東京の本部に送っていたが、この事件は1950年7月8日付で報告されている。そして、15日付では、黒人兵集団脱走が報告されることとなる。この7月4日の事件であるが、国立国会図書館の憲政資料室にある書類を見ても、Washington,　D. C. にある軍法会議の書類を見ても、犯人が黒人兵であることは確認できなかった。この事件の犯人には死刑が言い渡された。[39]

7月15日付の Weekly　Summary を検証すると、7月10日に起こった黒人兵集団脱走を報告するその中身は、次の10点にまとめられる。

1．7月10日夕方に小倉郊外で起こった集団脱走事件については、地方警察が7月11日に PSD（公安課）に報告している。
2．約100名の黒人兵が脱走したようだが、翌日朝鮮半島に送られる兵隊のようである。
3．多くの犯罪を起こしたが、日本人一名死亡、一名重傷。
4．CIC（防諜隊）による調査では、関係した兵隊は10名で、死亡や怪我をした人はいない。その地区の MP が事態をコントロールしている。
5．第8軍の MP はその事件に気付いていなかった。
6．11日午後には、100名の集団脱走は誇張であることが分った。

7．約10名の黒人兵が許可を得ずに、日本を出発する前に逃げ出したと思われる。
8．脱走兵を隊に戻す際に、黒人兵は発砲した。
9．日本人にも兵隊にもけが人は出ていない。
10．兵隊は予定通りの出発のために隊に戻った。

6．岐阜から来た連隊(1)、昭和25年（1950年）

1950年（昭和25年）6月25日、朝鮮戦争が勃発すると、一週間後に日本に駐留する米軍の各部隊に出動命令が下る。1947年10月以降各務原（かがみはら）の「キャンプ岐阜」に駐屯していた米軍第8軍団第25歩兵師団24連隊は、7月9日に基地前の名古屋鉄道各務原線三柿野駅から門司に向けて出発した。翌10日と併せて、この出動で三柿野駅を出発した米軍専用列車は合計13本で、内訳は客車60両、貨車376両で、一本が平均30両以上という長大なものであった。7月10日に小倉で集団脱走事件を引き起こした黒人兵は、まさに岐阜からやってきた兵隊であった。『岐阜県史』によれば、キャンプ岐阜には、米軍兵士が入れ替わりながら8,000人前後駐屯しており、キャンプのゲートに面した通りには、キャバレーやビヤホールが70件ほど並ぶ「租界　NAKA」と呼ばれる一角が形成された。米兵相手の女性も1,000人以上集まっていた。性病、堕胎、ヒロポンが広がり、戦場送りを前にした米兵たちによる暴行・発砲・脱走事件も起きていた。[40]この混乱は、朝鮮半島に送られる前に滞在する小倉や門司でも起っていた。それは7月17日付の報告書を読めばわかる。

アメリカの国立公文書館で第24歩兵連隊の「戦争日誌」（War Diary 24th Infantry, 6-31 July, 1950）[41]も閲覧する機会を得た。表紙はカラーで岐阜から列車で門司へ行き、船で釜山に渡り、また列車で戦場に赴くイラストが描かれていた。この記録にも門司や小倉での事件は書かれていない。

黒人兵集団脱走事件に関する被害届は、アメリカ、メリーランド州にある国立公文書館（通称NARAII）に保存してある。[42]被害届の数は72件であったが、次のような7月17日付の黒人兵による集団暴力事件の報告書もあり、門司方面は混乱していた状況であったので、松本清張が「黒地の絵」で描く7月10日の黒人兵集団脱走に関係するものは小倉だけに絞り、42件とした。国立国会図書館の憲政資料室では、1978年から太平洋戦争から日本占領期に関する資料を収集している。しかし、この小倉の事件の被害届は、マイクロフィルムに保存されてはいるものの、‘RESTRICTED’のスタンプが押されている状態での記録であり、フィルムから情報を読み取ることは出来ない。ここでは4件の被害届を紹介する。

July 17, 1950

TO: Chief of Kyushu Civil Affairs Region
Provost Marshal, Fukuoka Area

SUBJECTS: MASS VIOLENCE COMMITTED BY NEGRO OCCUPATIONARIES

Moji port has been busy with the continuous landing of occupation personnel and war supplies while a steady stream of service men is flowing into Moji city from Kokura to join the unit waiting further orders at the said port. The said servicemen are often seen walking about in the streets and cases of violent act, rape, intimidation and robbery committed by them have already been reported.[43]

被害届例(1)

SUBJECT: Illegal entry

Date and time: July 10, at 9 p.m.

The accused: 3 U.S. Army colored soldiers. Details are unavailable.

Brief description:

3 colored soldiers came into the complainant's house with the remark of "Konbanwa". The soldiers immediately left the place as the complainant went out to report himself to the Occupation and Japanese authorities.

被害届例(2)

SUBJECT: Unlawful act

Date and time: July 10, at 11:00 p.m.

The accused: 2 U.S. Army colored soldiers

Brief description:

xxxxx (female) living next door rushed into the complainant's house seeking her shelter. The complainant told her to hide herself in the toilet room. The soldiers came into the house and took her out of the said house. They vanished into the night.

被害届例(3)

SUBJECT: Attempted rape

Date and time: July 10, at 11 p.m.

The accused: 3 colored soldiers. Details are unavailable.

Brief description:

3 colored soldiers came into the prescribed house and said to the complainant, "Sleep with me". The complainant gave him her fist refusal, then one of the soldiers covered the complainant's mouth with hands while the other started to tickle her. All the soldiers vanished from the scene at the appearance of M.P.

被害届例(4)

SUBJECT: Robbery committed by Occupation personnel

Date and time: July 10, at 9 p.m.

The accused: 4 colored soldiers. Details are unavailable.

Articles stolen: (1) 3 bottles of beer
(2) 4 water−melons
(3) 2,700 yen in cash

Brief description:

4 Negro soldiers forced their way into the xxxxx liquor shop through the front door, and they departed from the scene taking the said items with them.

（「コンニチハ、ママサン」
声は咽喉から発音したように異様で複雑であった。
「あんた、進駐軍だわ」
（中略）
「パパサン、コンニチハ」
一人が、太くて渋い声で云った。五、六人の雲をつくように高い背は、身動きもせずにせまい入口にかたまっていた。
留吉は黙ってうなずいた。
「ビール」
と、大男はいきなり注文した。
「ビール、ナイ」
留吉は手を振った。この返事を聞いて、はじめて彼らの静止した姿勢が動揺した。
「サケ！」）[44]

（会社員某の家では、二十五歳の妻と夕食中、突然、表の戸を蹴破って四、五人の黒人兵が侵入し、サケ、ビイールと真黒な手を出したが、某が台所の一升瓶を差しだすと、彼らは銃を放りだして飲みはじめた。某はそのすきに妻を窓から裏の物置に隠したが、酒の後、妻を探した。部屋にいないことに気づいた一人の兵隊は、小銃の台尻で某をなぐり二週間の傷を負わせた。また、別の某の家では、妻が嬰児と二人で留守番をしているところを黒人兵に踏み込まれ、泥靴で部屋を荒らしたあと、妻の体を飢えた目つきで眺めていたが、表にMPのジープの音が聞こえると、かれらはガラス戸を破って逃げ出した。）[45]

7月10日の黒人兵集団脱走時間は午前7時に起こった不法侵入から始まる。次に午前9時に一件。その後被害届は19時まで途絶える。松本清張がその日朝日新聞西部本社を退社するのは、夜の8時頃である。その日は、西鉄電車を乗り継ぎ、三郎丸で降り、城野キャンプの横を通って帰る。

六月十一日（ママ），の晩、私は社を夜の八時ごろに出た。よくおぼえていないが、多分、将棋をさすか何かして、遅くなったに違いない。
私は、社から自分の家までは鉄道線路を歩くのが直線コースなので、いつもそこを往復していたが、夜は危険なので電車で帰る。降りるところは三郎丸という停留所だが、そこから家までは一キロ半ぐらいあった。その道の横が米軍補給廠の裏側に当るわけだが、家も少なく、九時ごろともなれば、夏でも戸を早く入れて火が見えない。田圃の向うには農家が点在していた。
私が通ったのは九時すぎだったと思うが、日ごろと少しも変ったところがなかった。途中は少し坂になって、そこを下ったあたりが盲唖学校になっている。その裏が補給廠の境だが、そのとき私は兵隊の影ひとり出遭わなかった。だから、家に帰って、その晩は睡った。翌る朝になって、なんとなく表が騒々しい。近所の人がほうぼうに不安そうな顔で立ってひそひそと話をしている。まわりには警官がうろうろしていた。[46]

松本清張が新聞社を出て、家に帰る迄に10件の被害届が出ている。松本清張の家のそばでも20時に強盗の被害届が出ている。その後も日を改めて翌７月11日の午前２時半を最後の被害届としたが、合計42件の被害届を黒人兵集団脱走事件に関係したものと判断した。その時間毎の事件の分布は論文の最後に資料として添付している。その際使用した地図は昭和28年のものを使用した。英文被害届にある住所に基づいて事件の起こった場所を地図の上に示したが、地図の問題と被害届に町名だけが書かれてあるものもあり、地図上で正確に示すことは不可能であった。大体その近辺で事件が起こったということである。KBC 九州朝日放送は1993年（平成５年）５月４日に創立40周年記念特別番組を放送した。それは『松本清張の挑戦　小説「黒地の絵」43年目の検証』というものであったが、番組に登場した元兵士は全員一様に７月10日の集団脱走事件のことを否定している。

７．岐阜から来た連隊⑵、昭和25年（1950年）

岐阜から来た第24歩兵連隊は、その構成員が全員黒人兵であった。この黒人兵だけの連隊はバッファロー・ソルジャーとして1866年に発足した合衆国陸軍第10騎馬連隊を嚆矢とする。1947年に第８軍の司令官が第24歩兵連隊を白人の部隊に統合する計画を出す。トルーマン大統領も翌年大統領行政命令9981号を出し、軍隊内の人種差別の禁止を宣言する。また、それに先立つ1944年、陸軍省は「黒人部隊の指揮」（Command of Negro Troops）[47]というパンフレットも作製している。結局、第24歩兵連隊は1951年に解散し、韓国で他のユニットと統合されるのだが、それまでは、いわば、隔離された連隊であった。[48]*Black Soldier White Army* という本がある。[49]これは、朝鮮戦争で戦闘のパフォーマンスが第24連隊は劣ると言われていたので、その原因を探ろうとするプロジェクトをまとめたものである。そこから1950年７月10日の事件につながるものを紹介する。つまり、小倉に来る前に岐阜での状況と朝鮮半島に渡った後の戦時下の様子は、統制の取れていない姿を示す証拠になるのではないか。アメリカ、ワシントン D. C. に Fort McNair という陸軍の基地がある。そこに陸軍歴史資料館がある。（U.S. Army Center of Military History Museum）次に示す最初の２例は NARAII 文書で、次の２例は陸軍歴史資料館にある資料である。

⑴　Major John R. Wooldridge の証言（1950年８月23日）[50]

問：７月８日の岐阜での出来事について話しなさい。

答：夕方50名近くの兵隊がゲートから外出したいと要求した。基地内と留まるように命令したが、従わず、もみ合いになり、投石を行う者もいた。鎮圧に45分かかった。
次の事件は門司で起こった。敷地内に留まるように言われていたが、ほとんど全ての兵隊が街に繰り出し、酒に酔い、乱暴狼藉や強姦未遂を働いた。この鎮圧には３時間かかった。[51]
７月24日には韓国尚州で約200名の兵士が持ち場を離れる事件が起こった。次に起った離脱は７月27日で、後方に行く車を止めて１日に約75名の兵隊が戦線を離脱した。

問：そういった離脱はいつ起きるのか。

答：敵の攻撃が始まると起る。

⑵　Captain Lawrence M. Corcoran の証言（1950年９月１日）

問：所属する中隊はいままで命令の無いままに何度退却をしたのか。

答：３回。1950年８月16日には、韓国の咸安（ハマン）で味方が攻撃されているという連絡を受け、監視所に向かうと、敵が前線を突破したという連絡を受けた。気がつくと、そこに残っていたのは、私と25名の兵隊だけで、他はいなくなっていた。

問：君の連隊は死傷率が高いがなぜか。

答：許可なく持ち場を離れるからです。命令があっても無くても、兵士たちはパニック状態になるからです。

⑶　James T. Burke の電話による証言（1989年１月23日）[52]

1948年10月に岐阜に着任する。

日本での出来事：岐阜を出る前の週に、兵隊たちはガールフレンドに会いたがっていた。AWOL（absence without leave＝無断外出）をして、MP に追われた。発砲する兵隊もいたが、皆帰隊した。

⑷　Clarence Ferguson の証言（1988年９月２日）

1948年５月に第24歩兵連隊に加わる。

問題は総じて小さいもので、たとえば、無断夜間外出や酩酊である。

８．AGRS（米軍墓地登録部隊）[53]と CIU（中央個人識別班）[54]、３人の日本人、昭和25年（1950年）

朝鮮戦争が激化すると、戦死者の遺体処理の問題が起こる。遺体を確認し、本国に送る施設は朝鮮半島に作るのが良いのだが、適当な建物や設備を作るのには60日～90日かかり、しかも中国軍の参戦もあり、国連軍は南下を余儀なくされていた。小規模ながらも国連軍の墓地は朝鮮半島に作られてはいたが、小倉が Grave Registration Center（死体処理）としての役割を演ずることとなった。司令官はマーツ大佐だった。

そこに３人の日本人が関わることとなる。九学会連合対馬調査に加わった古江忠雄（ふるえただお d. 1988）は埴原和郎（はにはらかずろう1927-2004）と香原志勢（こうはらゆきなり1928-）よりも先に着任していた。そこでの様子は埴原和郎が『骨を読む　ある人類学者の体験』[55]で明らかにしている。これは後に、若干内容を変え、『骨はヒトを語る　死体鑑定の科学的最終手段』[56]という本になる。

「黒地の絵」の後半は電信による戦況を伝える冒頭部分が終わると、1951年の元旦開けの戦況がある。それによると、米軍が再び京城を放棄し、水原、原州に後退したとある。それとともにおびただしい戦死体が北九州に輸送され、荷揚げ人夫は死体を「棒鱈」と呼び、死体処理に関わる人夫の日給が死体一体につき800円という噂が続く描写となる。埴原和郎の本も冒頭は日給の話で、日給千円、いや三千円はかたいらしいという会話がささやかれはじめた、とある。実際の所、埴原は二ヵ月と二十日の契約で、一ドル360円の時代で、400ドルであった。食費を引かれ、その三分の二が支払われたとある。[57]（軍属で働いていた米国人は700ドルから1000ドルであった。）

松本清張の描く歯科医香坂は、前野留吉を匂いで AGRS 勤務だと判断するが、埴原和郎も屍臭の苦しみを書いている。３名の日本人学者は、小説で描かれている香坂歯科医とは違い、遺体の個人識別を完了させることが仕事である。彼等は法医人類学者（Forensic Anthropologist）と分類される。

彼等は、最終的に骨の識別をし、人種の確定を行うのであるが、次に示す１～５までの処理は６のための前段階の仕事とされる。

１．認識票
２．ランドリーマーク
３．入れ墨
４．骨を並べる
５．歯の記録
６．骨の識別・人種の確定

香原志勢（こうはらゆきなり）は昭和二十七年に「死體の個人識別」[58]という論文を古江忠雄、埴原和郎の連名で発表する。この論文は小倉での AGRS 体験が元になっているのは明らかである。論文の最後は、「我々は国籍、人種の如何を問わず、戦争の災禍に餘りにも多くの青年が未だ死ぬべき時に非ずして、しかも死んでいつた事實を心から悼み、稿をとじる。」であった。

古江忠雄の略歴を示す。[59]

1950年　東京大学理学部人類学科卒業。
　　県立奈良医科大学解剖学教室助手。
　　九学会対馬調査に参加。
1951年　GHQ の要請により米軍小倉キャンプの中央個人識別班（CIU）に勤務。その後、横浜の米陸軍遺体収容所、立川基地と移転。
1966年　羽田のカナダ航空機事故、富士山の BOAC 機事故の遺体鑑識にあたる。
1973年　タイの米軍中央遺体鑑識所に出向。ベトナム戦争の遺体鑑識に従事。
1976年　エジプト航空機事故（バンコク）の米兵の鑑識、日本人犠牲者の身元確認にあたる。
1977年　ハワイの米国陸軍省中央鑑識研究所に赴任。
1986年　第二次世界大戦の米兵の遺骨の鑑定を行う。

埴原和郎と香原志勢の80日の契約期間に比べ、古江忠雄の小倉での勤務は５年に亘った。

この米軍の小倉基地での五年にわたるオペレーションの期間には、世界中の人類学者が十人ほど関係しました。東大からも気心のわかったお二人に短期間来てもらいました。しかし、外国人の中には、自称人類学者で全然駄目なイカサマもまじっていましたし、仕事の性質上、アル中になるのもいました。また意欲に燃えてきたけれども、あまりにも凄い仕事なので、くじけた人もいました。仕事が重労働の上に、職場の臭みが凄いのです。何しろ、腐乱死体や生々しい遺骨の個人識別という仕事なんですからね。私、初めは五カ月の約束で、そんなに長くやるつもりはなかったんですが、しかし、やっているうちに、自分がこれをやめたら、後はどうなるんだというふうに、自分で自分がわからないうちに、この仕事からいつか足が抜けなくなっていたのです。[60]

香坂歯科医も前野留吉に聞く。

「君は、もうあの仕事になれたのかね？」

「何とかやってゆけそうです。初めは嘔きそうだったので、唾を吐いたら、下士官にひどくどなられました。」[61] [62]

AGRS の司令官はマーツ大佐であったが、彼は、1951（昭和26年）年５月５日（土）の毎日新聞北九州版に「聖なる協力に感謝」という談話を発表する。当時、進駐軍に関連した記事は英文に直され、GHQ に送られていた。この新聞記事とその英訳は国立公文書館でも確認することが出来た。ここで当時米軍キャンプに勤務していた永吉明さんの証言を加える。

処理後の遺体は大切に取り扱われて居ました。本では銅の棺桶とありましたが、内部は鉛と聞いてます。城野が閉鎖になった時、倉庫に残った棺桶をトレーラーでずいぶん運び出しました。１個が200kgあり、非常に頑丈なものでありそのまま土葬にするそうです。私は1951年春に門司ポートのキャンプにて見た事を書きましょう。第一岸壁の倉庫を挟んで汽車の線路が有り、城野から送られて来た遺体が貨物車に積んであり、そこに正装した儀仗兵が出迎え、棺桶を貨車から倉庫に移し、そこで棺桶の上に星条旗をかぶせ、儀仗兵が国家を演奏し見送る中リバティ船のクレーンで吊り揚げられて船倉に消えました。ほどなくすると船倉から星条旗が吊り下されて来ると次の棺桶にかぶせ、一体一体帰国の旅につきました。見ていてそれは荘厳というか厳粛な光景でした。臭いなどはまったくしませんでした。[63]

アメリカ国立公文書館には、門司港で毎週行われていたセレモニーの式次第も保管されてある。[64] 遺体も戦争末期になると海上輸送から飛行機での輸送に変るが、その記録写真や、取扱注意書も同様に保管されている。[65]

埴原和郎の著書『骨を読む』に戻る。あとがきに次のようにある。

――以上を書き終わって間もなく、偶然にも某週刊誌に米軍死体処理部隊の記事が掲載された。これによると、第二次世界大戦や朝鮮戦争当時の戦死体処理がいまだに片付かないらしい。かつて、小倉でいっしょに仕事をした古江氏もそこにいるという。太平洋の戦火がおさまってからすでに二十年、朝鮮戦争が終結してからも十二年を経過しているのに、この執拗なまでの戦死者に対する米国政府の配慮にわたしはおどろくとともに、人道というものをあらためて考えさせられたように思った。[66]

埴原和郎の指摘について、３点補足を加えこの項を終る。

まず、2011年10月22日と2012年５月25日の BBC ニュースである。2011年のニュースでは、北朝鮮とアメリカが朝鮮戦争で戦死したアメリカ軍兵士の遺体捜索を再開することに同意したもので、2012年のニュースでは、60年前の朝鮮戦争で戦死した12体の韓国軍兵士の遺体が韓国に戻ってきたというものである。これは2000年から2004年にかけてアメリカの遺体発掘隊が見つけた200体の中に含まれ

ていた。[67]

二点目は、古江忠雄が述べていることである。

古江　小倉以来の仕事を通じて、もう一つ印象に深く刻みつけられているのは、鑑識という観念の、日本人とアメリカ人の違いですね。亡くなった方に対する観念が、第一に違います。旧日本の軍では、四角い箱に何が入っているかわからないものを遺族に渡した。これ、あるいは日本人の報が精神的なのかもしれません。けれども、アメリカはそうではありません。鑑識の結果が疑わしいと思ったら、遺族は裁判所に訴えて、それから自分たちが選んだ専門家を指名して、その遺体の鑑識結果の信憑性を問いますね。

曽野　そうすると逆に、あなたの息子さんの骨とは断定できませんでした、といって返せないケースもあるんですね。

古江　あります。どう手を尽くしてもわからない場合、無名戦士の墓に埋葬します。[68]

そして彼は、生前の顔写真と頭蓋骨を重ね合わせるスーパーインポーズ法というものをDNA鑑定が無い時代に開発する。

三番目は、1983年度のピュリツァー賞受賞作家[69]、Susan Sheehan（1937-）が1986年に出版したノンフィクション、*A Missing Plane* である。1944年３月22日（水）にアメリカ空軍のＢ－24がポート・モレスビーを飛び立った。３人の搭乗員を含め22名が乗っていたが、そのまま行方不明となる。その飛行機は、38年後の1982年４月飛行機は山中で発見される。早速遺骨収集が行われ、ハワイ中央鑑識研究所に送られる。この本の第二部はIdentification（同定）とタイトルが付いているが、そこで骨の鑑識を行うのが古江忠雄である。東京医科大学法人類学研究室の橋本正次は当時古江忠雄の元で研究しており、パプアニューギニアで回収された骨の身許確認のことを後に講演で紹介している。[70]

９．「３枚の地図」と「キャンプ小倉配置図」[71]論文に添付した資料の説明

９－１．昭和23年（1948年）の小倉市街図

昭和23年といえば、松本清張が戦争から戻り、小倉に家を探し、家族を呼び寄せ、箒のアルバイトを始めてから３年経ち、食べものも豊富になっていった頃である。アルバイトは箒売りから印刷屋の版下書きと懸賞金目当てのポスター書きとなる。小倉駅は現在の西小倉駅で、その前の広大な敷地（小倉城や現在の松本清張記念館もそこに含まれる。）にはキャンプ小倉が出来、米軍が駐屯する。RTO（鉄道司令部）も置かれる。東（右）へ700メートル移転して現在の小倉駅の場所へ移動するのは昭和33年である。

昭和二十年の秋に帰国したが、そのとき家族は妻の郷里である佐賀県の田舎にいた。わたしだけは勤めのために小倉に家を借りたが、すでに廃止された兵器工廠の工員住宅あとだった。六畳に四畳半二つの家で、あとからよびよせた両親をその四畳半に置いた。父が七十、母が六十五だった。二年間、嫁の実家の世話になっていたので、両親とも穴の中から抜け出たようによろこんでいた。[72]

だが、すぐに食糧不足と恐怖的なインフレとが襲ってきた。翌年、子供が一人ふえ、家族はわたしをいれて八人となった。[73]

わたしは内職にわら箒の卸売りをはじめた。それをおもいついたのは、佐賀の田舎では農家の何軒もがさかんにワラ箒をつくっているのに、小倉市内の店には一本も箒がないことからである。[74]

昭和二十三年の春を限りにしてわたしの商売も終焉を告げた。大津、京都、大阪、広島、三田尻と集金して帰ったが、これが終りだと思うと、これらの土地に哀惜が起きた。[75]

9－2．昭和25年（1950年）の小倉都市計画図

この年は「週刊朝日」の懸賞応募小説に「西郷札」で応募し、3席になった年である。松本清張は国鉄添田線を通って仕事場に通っていた。『砂の器』で中央線沿いに小さな紙吹雪を探し歩いた刑事今日栄太郎を彷彿させる経験をした。[76]

このころ、戦争も前、入社したころにつくった一着きりの古洋服が身体にも合わなくなっていたので、復員したときの兵隊服でしばらく社に通勤し部長にしかられたりした。兵隊の編上靴をはいていたのは、家の横を通る鉄道線路が、新聞社へ行く近道なので、線路の石ころを踏むのに便利だったからだ、が、その石ころの中に大事にしていたシャープペンシルを社の帰りに落し、うす暗い中をさがしまわったことがあるが、それも原稿をそれで書いていたからだ。[77]

この地図には、朝鮮戦争で死亡した国連軍兵士の霊を慰めるメモリアル・クロスが認められる。7月10日の松本清張の会社からの帰宅ルートも書きこんでおいた。地図の南（下）側の北方に米軍住宅が出来ている。そこは、清張の家から一里（4キロ）離れている。『半生の記』から引用する。

ここで少し回想したいことがある。

まだ、印刷所に入る前、父親が飲食店の景気が悪いので、餅売り露天を、小倉から一里ばかり南の北方というところにある兵営の前に出したことがあった。私にも手伝えというのでついて行くと、寒風の吹きさらしの中で、七輪の上にかけた鉄板で餅を焼くのであった。その餅も、餅屋から仕入れてくるので極めて利が薄い。私は焦げぬように絶えずヘラでかえしながら、通行人の足もとばかり見ていた。少しでも人が寄ってきようになると、客ではないかとミカン箱から腰を浮かしたものだった。

私はそのとき、一冊の岩波文庫を持っていた。ダンセイニの『神々の笑い』という翻訳ものであったが、ときどき七輪の前を抜けては、練兵場の丘に上り、懐の本をとり出しては読んでいた。そこには黄色く枯れた草と、寒い風にそよぐ松の木立があった。一里の道の往復には荷車をひっ張るのだが、仕入れた餅の半分を残して帰る日は心が重かった。車から吊りさげたバケツがガチャガチャゆれるので、いらいらした。[78]

松本清張が下関から小倉に移るのが1917年（大正6年）で、小学校も天神島小学校に転校する。大正13年（1924年）に小倉市立板櫃尋常高等小学校（現在の清水小学校）を卒業する。各地図にはその場所も書き入れた。

９－３．昭和28年（1953年）の小倉市街図

昭和28年は東京本社の広告部に転勤した年であるが、この地図にはキャンプ城野の西（左）側、国鉄日豊線を挟んだ所にR&Rセンター（Rest and Recuperation Center）が出来ている。兵士として前線勤務が６カ月を越えると死傷者が急に増えるということは、第二次大戦中からも分っており、朝鮮戦争がはじまると、1950年12月にRest & Recuperation Programが策定され、６か月から７カ月勤務した兵士には５日間の休暇が与えられ、R&Rセンターに送られた。[79]ディーン少佐は、昭和28年９月18日に小倉を訪問し、大歓迎を受けるのだが、センターの開所式にも出席したことは先に述べた。[80]小倉のR&Rセンターについての資料はほとんど収集することは出来なかったが、『小倉六十三年小史』の中の「座談会　小倉の今昔」で、「小倉に金を落した米軍」という話の中にセンター設置のことも出ている。[81]そのことは、次の引用からも読み取れる。

朝鮮戦争の進展に伴い、小倉には新しく２つの機関が新設された。その一つはR&Rセンターである。

城野に設置されたこの機関の任務は、朝鮮半島からの帰休兵の受け入れである。前線で６カ月従軍した兵士には５日間の休養が与えられた。その休暇を日本で過ごすため、帰休兵は芦屋に空輸され、ここからバスで城野へと運ばれる。

帰休兵達はいずれもひげを伸ばし、汚れた戦闘服をまとってR&Rセンターに到着する。ここで入浴、散髪したあと、新しい軍服を支給され、小倉の街にくり出すのだ。ゲートの周辺には輪タクが待ち受け、彼らを乗せては次々と街へ消えていく。戦地手当を含めて月約150ドル、日本人の５倍以上の月給の６カ月分を５日間の休暇でばらまく帰休兵は小倉の街にとって大特需、女達は彼らを街に連れ出しては靴やハンドバッグをねだる。そしてこれらの商品は帰休兵が前線に帰っていったあと、再び店頭に並べられるのだ。小倉の街は4,000人を超える日本人従業員の給与をも含め、米軍の落すドルで朝鮮特需に沸いた。

朝鮮戦争で新設されたもう一つの機関は、AGRSと称された遺体処理部隊である。[82]

R&Rセンターは小倉の他に奈良にも設置された。奈良のセンターについては女性史研究グループが聞き取り調査などに取り組んでいるので、その証言から小倉の当時の様子を垣間見ることが出来る。[83]

９－４．キャンプ小倉配置図

ここは、陸軍の小倉工廠跡地である。1923年（大正12年）の関東大震災で、陸軍造兵廠東京工廠は壊滅的な被害を受ける。1927年（昭和２年）小倉に工廠設置が決まり、1933年（昭和８年）に発足した。敷地面積は17万6581坪で、就業者は４万人を数えた。1940年（昭和15年）小倉造兵廠に改称し、陸軍兵器本部の直属となった。これについては、詩人中原澄子が『陸軍小倉造兵廠』を2011年に自費出版している。[84]昭和25年に小倉に住むようになった中原は、当時を次のように描写する。

昭和二十五年（一九五〇年）私は自活する道を求めて小倉に住みついた。朝鮮戦争のさ中で、街に米軍が溢れていた。そんな折、小倉の紫川の周辺に高いスレート板のような塀を巡らせた地区が

あった。何だろうと中をのぞこうとしてもできるようなものではなかった。塀をたどって延々と歩いてみたが中を見ることができなかったので、あきらめた。米軍に接収された地区だった。それが小倉陸軍造兵廠であることも知らず過ごすうちに・・・[85]

1945年（昭和20年）、米進駐軍により接収され、それは1959年（昭和34年）の接収解除まで続くことになる。この地図の復元は、北九州市在住の永吉明さんにお願いした。永吉さんは、1950年から1951年にかけては短期的に、1953年２月からは約５年間米軍関係の仕事に就いており、貴重な資料や経験談の提供をして頂いた。その中には、当時の給与明細、雁ノ巣（福岡）飛行場についた米兵を小倉のR&Rセンターにトラックで輸送した話、ディーン少将が朝鮮戦争に連れて行った日本人の話、門司港から厳粛に積み込まれる戦死者の話など「黒地の絵」の当時を知る貴重な証言と資料であった。「黒地の絵」に次のような描写がある。

ラジオが夜九時のニュースを終ったあと、ときどき、こんな放送がつけたされた。
――登録労働者の皆さま。駐留軍関係の仕事がありますから、ご希望の方は今夜十一時までに小倉市職業安定所前におあつまりください。[86]

永吉さんが門司港でTemporary Driverの仕事に就いたのは、朝のラジオ放送だった。次のような状況だった。

三月のまだ寒い朝ラジオの６時半の求人案内で、Temporary Driverを募集するので７時までに労務管理事務所前に集合せよとのニュースを聞き、顔も洗わずに家を飛び出しました。結果トラックでMoji Portに連れて行かれここで朝鮮戦争を間近に見る事に成りました。日当450円は休日無しですから、月に１万３千５百円[87]は当時の運転手には破格の値段でした。運転手と言っても町を走るのではなく、門司ポートを埋めつくしている車両を戦地に送り出すのです。毎日貨車で送られてくるトラックを降ろして、ヤードにためるはしからリバティ船に積み込みました。船が入港すると３～４時間であらゆる戦時物資を積み込んで出港すると待っていた次の船が入り、それが24時間休みなくおこなわれていました。それが１岸から５岸まで全部で行われていました。まさに戦争です。[88]

10. 最後に、昭和33年（1958年）

昭和33年の前半に松本清張は事件や事実に基づいた作品を書いた。この論文では、その中から、「黒地の絵」をノンフィクションとして読む試みを行った。色々な資料を提示して、松本清張の作品に迫った。資料の中には明らかに松本清張が参考にしたものも確かに存在する。専門家から見れば、松本清張の描写に不十分な点を感じる所もあろう。しかし、それでも小説家松本清張の筆の力を否定することは出来ないのではないか。この年は引き続き「真贋の森」や「装飾評伝」を書く。この２つもモデルが存在する作品である。この傾向は「小説帝銀事件」（昭和34年）や「黒い福音」（昭和36年）へと続く。そして、松本清張のノンフィクションへの関心は、昭和35年に連載した「日本の黒い霧」（昭和37年）、そして、昭和39年から46年まで書き続けた全13巻の「昭和史発掘」（昭和41年から47年）で

一つのピークを迎えることになる。その意味でも、昭和33年の「黒地の絵」はエポックメーキングな作品とも言える。『松本清張傑作選　悪党たちの懺悔録』で７つの清張作品を編んだ浅田次郎は、次のように書いている。

「黒地の絵」は松本清張の作品集がさまざまの形で刊行されるたびに、必ずと言っていいほど選ばれる作品であるから、すでにお読みになられた読者も多いであろう。

朝鮮戦争下の小倉、すなわち永久不戦を誓った日本の、最も戦場に近い場所が舞台というだけでも、のっけから興味をそそられる。むろん私は、この時代背景を知らない。陰惨な物語のヒントとなるような事件が、実際にあったかどうかも知らない。だがこの作品の持つ底力を考えれば、何から何まで作り話だとは思えないのである。だとすると、作者はこの小説を書くにあたって、相当の勇気をふるったのではなかろうか。一言一句に気遣い、世論を怖れて汲々と筆を進めるわれわれの世代からすると、まさに神を見るような思いである。清張作品のダイナミズムの源は、あらゆる譏りを怖れぬこの勇気にある。[89]

「点と線」は雑誌『旅』に昭和32年２月号から昭和33年１月号まで連載され、２月に出版される。「眼の壁」は32年４月14日から12月29日に『週刊読売』に連載され、33年２月に出版される。この２冊はベストセラーとなり、いわゆる社会派推理小説ブームが始まることとなる。これらは昭和33年の他の作品を含めて稿を改める。また、松本清張は、昭和33年３月からは「ゼロの焦点」を『宝石』に連載を始めた。（33年３月号～35年１月号）同じ時期、同じ雑誌に鮎川哲也（1919－2002）は「黒い白鳥」を書く。（昭和34年７月号～昭和34年12月号）この二つの作品を比較検討することは、鮎川哲也自身も創作ノートに記しているように、[90]検討に値するので、これは昭和35年の稿でまとめることにする。

11.「黒地の絵」について

これまで「黒地の絵」については以下に示すもので検証されている。(6)(7)(8)は清張生誕100年の年に当たる。作家佐木隆三は「黒地の絵」が清張作品の最高傑作と(8)の中で述べている。

(1)「報道を禁じた駐留軍犯罪＝小倉キャンプ黒人部隊の反乱事件＝」
　北九州日日新聞昭和32年（1957年）５月14日
(2)　松本清張小倉に行く　昭和32年（1957年）秋　『作家の手帳』
(3)「証言　黒人兵集団脱走　（上）（中）（下）（補）」
　朝日新聞昭和50年（1975年）７月９日～23日
(4)『松本清張の挑戦　小説「黒地の絵」43年目の検証』　KBC 九州朝日放送創立40周年記念特別番組平成５年（1993年）５月４日放送
(5)「黒地の絵展－刻まれた記憶：ふるさとの小倉シリーズ６」
　北九州市立松本清張記念館
　平成17年（2005年）８月１日～10月31日
(6)「清張の昭和１～10」『ニッポン　人・脈・記』

朝日新聞平成21年（2009年）８月６日～18日
(7)「朝鮮戦争と講和１～８」『検証　昭和報道』
朝日新聞平成21年（2009年）10月15日～24日
(8)「高村薫・佐木隆三　往復書簡『清張を巡る対話』」
NHK BS２　平成21年（2009年）12月７日放送

注

1 この論考は平成23年度長崎外国語大学在外研究の成果を発表するものである。この論考の一部は平成24年（2012年）６月２日（土）に早稲田大学小野梓講堂で行われた「第26回松本清張研究会」で発表したものである。
2 松本清張「あとがき」『黒地の絵』光文社　昭和33年 p. 223
3 「波の塔」『松本清張全集18　波の塔』文藝春秋1972年
「濁った陽」『松本清張全集４　黒い画集』文藝春秋1971年　pp. 343-418
「現代官僚論」『松本清張全集31　深層海流・現代官僚論』文藝春秋1973年 pp. 225-498
「不在宴会」『松本清張全集６　球形の荒野・死の枝』文藝春1971年　pp. 426-436
4 「歪んだ複写」『松本清張全集11　歪んだ複写・不安な演奏』文藝春秋1972年 pp. 5-233
5 永井荷風　（1879（明治12）－1959（昭和34））の『墨東綺譚』（1937年（昭和12））や『断腸亭日乗』（1917年（大正６）－1959年（昭和34））にも描かれている場所である。（『摘録　断腸亭日乗（上）』岩波文庫1987年 pp. 353-357　昭和11（1936）年５月16日）
6 松本清張『作家の手帖』文藝春秋1981年 p. 43
7 松本清張「絵具」『松本清張全集34半生の記』文藝春秋　1974年 p. 81
8 朝日新聞北九州版　昭和25年７月18日付
9 松本清張「あとがき」『松本清張全集37　装飾評伝　短篇３』文藝春秋　1973年 p. 551
10 北九州市立松本清張記念館より新聞資料の提供を受けた。
11 松本清張「黒地の絵」『松本清張全集37　装飾評伝　短篇３』文藝春秋　1973年 pp. 173-174
12 松本清張『前掲書』p. 185
13 松本清張『前掲書』p. 173
14 松本清張『前掲書』pp. 170-171
15 松本清張『前掲書』p. 183
16 松本清張『前掲書』p. 185
17 中桐正夫「東京天文台が登場する小説「金環食（松本清張）」『アーカイブ室新聞』（2011年６月29日　第506号）http://prc.nao.ac.jp/prc_arc/arc_news/arc_news506.pdf（2012年８月21日）
18 松本清張「金環食」『憎悪の依頼』新潮文庫　昭和57年 p. 244
19 松本清張「通訳」『松本清張短篇全集04　殺意』光文社2008年 pp. 221-229
20 松本清張「あとがき」『前掲書』p. 293
21 マーク・ダイン『ニッポン日記』（上）筑摩書房　昭和26年、1945年12月22日、12月24日、12月30日、1946年２月21日の記事を参照しているのではないかと思われる。
22 SCAPIN（Supreme Command for Allied Powers Instruction Note）
23 www.asia2020.jp/japan/occupation_press.htm（2012年５月20日）
24 松本清張「黒地の絵」『松本清張全集37　装飾評伝　短篇３』文藝春秋　1973年 p. 169
25 松本清張『前掲書』p. 171
26 William F. Dean, *General Dean's Story,* The Viking Press, 1954 p.12
27 Elizabeth Gray Vining, *Windows for the Crown Prince,* J.B. Lippincott Company, 1954, p.285
28 op. cit. p. 286
29 op. cit. p. 287
30 この会は、1947年より始まり、最初は、民俗学協会、人類学会、社会学会、考古学会、言語学会、民間伝承の会（49年より日本民族学会）の６学会であったが、1948年に地理学会、宗教学会も参加し、８学会となった。さらに、1951年から心理学会も参加し、九学会連合と呼ばれるようになる。
31 宮本常一『私の日本地図15－壱岐・対馬紀行』未来社　2009年　pp. 9-10
32 板野徹「「寄り合い」と朝鮮戦争－－宮本常一の九学会連合対馬調査をめぐって」現代思想　39（15）、青土社　2011　pp. 170-189
「九学会連合の共同調査と「国土」」日本大学経済学部産業経営研究所所報（70）2012
33 朝鮮戦争に関係した日本人を描いたものとして、北杜夫「浮漂」（1958年）、田中小実昌「上陸」（1957年）、野呂邦暢「壁の絵」（1966年）がある。いずれも集英社　2012年『コレクション　戦争と文学Ⅰ朝鮮戦争』に収録されている。論文川口

啓子　「従軍看護婦派遣への道程に関する研究ノート（４）」『大阪健康福祉短期大学紀要　第５号』石丸安蔵「朝鮮戦争と日本の関わり－忘れ去られた海上輸送－」『波濤』34（２）（197）pp. 58-83.　2008年藤井久「朝鮮戦争で湧いた後方基地『日本』狂騒録」『丸』56（７）pp. 98-101　2003年など。

34 毎日新聞昭和24年８月24日付夕刊

35 William F. Dean, op. cit.には1945年６月24日の38度線の写真を始として貴重な写真が含まれている。

36 小倉在住の永吉明さんによれば、上野保さんはその後、事故死したとのことである。

37 毎日新聞社編『激動二十年　福岡県の戦後史』毎日新聞社　昭和四十年 pp. 170-171

38 松本清張「絵具」『松本清張全集34　半生の記』文藝春秋1974年 pp. 78-79
毎日新聞社編『前掲書』pp. 161-162

39 Office of the Judge Advocate General: *BOARD OF REVIEW AND JUDICIAL COUNCIL* Vol.12, 1951（LLMC DIGITAL アメリカ法総合資料集成雄松堂書店「オンライン総合データベース」）

40 岐阜県（編）『岐阜県史　通史編　続・現代』1973年　pp. 51-52,　p. 338

41 NARA II, RG 338, Entry 37042, Box 4469

42 北九州市立松本清張記念館にも被害届のコピーが71通ある。

43 NARA II 保存資料

44 松本清張「黒地の絵」『松本清張全集37　装飾評伝　短篇３』文藝春秋　1973年 p. 175

45 松本清張『前掲書』pp. 185-186

46 松本清張『前掲書』p. 79

47 NARAII 文書。

48 岡田泰弘は「占領下の日本におけるアメリカ黒人部隊をめぐる人種とジェンターのポリティクス－キャンプ岐阜に駐留の第24歩兵連隊を中心に－」『金城学院大学論集、社会科学編７(2)』2001年 pp. 80-94で日本におけるアメリカ黒人部隊をめぐる人種とジェンダーのポリティクスを論じている。

49 Bowers, William T., William M. Hammond, George L. MacGarrigle, *Black Soldier White Army,* Center of Military History, 1996（松本清張の名前も80ページの脚注にあるが、Seiichi Matsumoto となっている。）

50 Major Wooldridge と Captain Corcoran の証言はいずれも NARAII 文書。

51 これは７月17日付の報告書の事件と考えられる。

52 24th Inf. Reg. Box 4

53 American Graves Registration Service

54 Central Identification Unit

55 中公新書79　昭和40年

56 講談社＋α文庫　平成７年

57 埴原和郎『骨を読む　ある人類学者の体験』中公新書79　昭和40年 p. 2,　p. 21

58 古江忠雄・埴原和郎・香原志勢「死体の個別識別」（『人類学雑誌』第62巻　第４号　日本人類学会　昭和27年７月　pp. 38-40

59 曽野綾子『曽野綾子の好奇心対談』サンケイ出版1978年 pp. 23-41（古江忠雄「骨に魅せられて27年」）を元に作成した。

60 曽野綾子『前掲書』pp. 35-36
岩下俊作は『小倉六十三年史』の中で「黒い嵐」という物語を書いているが、その中で、死体処理の仕事で精神を病んだ人物の描写がある。

61 松本清張「黒地の絵」『松本清張全集37　装飾評伝　短篇３』文藝春秋　1973年 p. 193

62 佐木隆三「奇蹟の市」（初出『文藝』1967年12月号）集英社　2012年『コレクション　戦争と文学Ⅰ朝鮮戦争』pp. 585-644で「黒地の絵」と同じ時期の小倉を描く。

63 2012年３月13日付

64 NARAII, RG 338, Entry 37042, Box 5550

65 NARAII RG 338, Entry 37042, Box 5551

66 埴原和郎『前掲書』p. 181

67 http://www.bbc.co.uk/news/world-asia-pacific-15413272（2012年８月28日）
http://www.bbc.co.uk/news/world-asia-18203588（2012年８月28日）

68 曽野綾子『前掲書』p. 37
朝鮮戦争の無名戦士の墓はアメリカ、バージニア州アーリントン国立墓地にある。

69 *Is There No Place on Earth for Me?* 統合失調症で苦しむ女性を描いたもの。

70 http://www.geocities.co.jp/Technopolis/9073/zinkotuhp/archive/hashimotomasatugu.html（2012年５月26日）

71 ３枚の地図に関しては、北九州市立中央図書館の協力を得た。キャンプ小倉の配置図の作成については、北九州市在住の永吉明さんの協力を得た。

72 その当時の様子を『半生の記』で次のように書いている。「私が出征した直後、両親は飯塚という炭鉱町にある母の妹の家を頼って行った。つまり、妻と子供は佐賀の実家に、両親は叔母夫婦の家にそれぞれ別れたのだった。ところが母は妹夫婦のところに厄介になっているうち、忽ち相手と喧嘩をはじめ、途中からそこを出て、佐賀の妻のもとに転げこんだのだった。」（松本清張「鵲」『松本清張全集34　半生の記』文藝春秋1974年 p. 57

「北友会会報　北九州市立大学同窓会会報」Vol. 103平成22年12月15日発行 p. 33に「清張の会」が松本清張旧居を保存し、一般公開するという投稿記事がある。

[73] 松本清張『自伝抄Ⅰ雑草の実』読売新聞社　昭和52年 pp. 98-99

[74] 松本清張『前掲書』p. 99

[75] 松本清張「泥砂」『松本清張全集34　半生の記』文藝春秋1974年 p. 73

[76] 松本清張「砂の器」『松本清張５　砂の器』文藝春秋　1971年 pp. 167-170

[77] 松本清張『自伝抄Ⅰ雑草の実』読売新聞社　昭和52年 p. 103

[78] 松本清張「暗い活字」『松本清張全集34　半生の記』文藝春秋1974年 pp. 30-31

[79] 林博史「東アジアの米軍基地と性売買・性犯罪」『アメリカ史研究』（日本アメリカ史学会）第29号、2006年　pp. 22-23

[80] 「蘇る在任中の思い出　ディーン少将思い出の北九州へ」毎日新聞夕刊昭和28年９月18日付

[81] 『小倉六十三年小史』小倉市役所　昭和三十八年　p. 114

[82] 篠崎昭廣「米軍勤務で役立った英語」皆川節夫（発行責任者）『見よ、青嵐の足立山―小倉外専卒・北九大卒生の占領軍での異文化体験記―』平成８年 pp. 69-70　これは宮崎市在住の原正義先生より資料の提供を受けた。

[83] 奈良女性史研究会「奈良女性史研究会2004」Vol. 82005年３月発行
第10回全国女性史研究交流のつどい実行委員会「第10回全国女性史研究交流のつどい in 奈良」報告書
吉田容子「米軍施設と周辺歓楽街をめぐる地域社会の対応―「奈良 RR センター」の場合―『地理科学』vol. 65no. 4　2010, pp. 245-265

[84] 中原澄子（編）『小倉陸軍造兵廠』創言社2011年　この本は200冊限定の私家版である。この件については、北九州市在住の中島加代子さんから情報を得た。中島さんには、昭和28年の地図の復元や旧国鉄添田線に沿って、旧松本清張宅への道を辿る調査や、旧陸軍小倉造兵廠跡の調査にも協力頂いた。

[85] 中原澄子『前掲書』p. 127

[86] 松本清張「黒地の絵」『松本清張全集37　装飾評伝　短篇３』文藝春秋1973年 p. 189

[87] 前野留吉の月給は１万６千円とある。松本清張『前掲書』p. 193

[88] 2012年３月13日付

[89] 浅田次郎（編）『松本清張傑作選　悪党たちの懺悔録』新潮社2009年 p. 273

[90] 鮎川哲也「創作ノート」『黒い白鳥』東京創元社　2002年 pp. 427-428

参考文献

１．米兵の軍法会議関係

JUDGE ADVOCATE GENERAL'S CORPS

BOARD OF REVIEW AND JUDICIAL COUNCIL HOLDINGS, OPINIONS AND REVIEW VOLUME 12 Including CM 343576-CM 346512 Also CM 341782

OFFICE OF THE JUDGE ADVOCATE GENRAL WASHINGTON, D.C. 1951

http://www.llmcdigital.org/docdisplay.aspx?textid=31741231&type=PDF&topage=31741249（2012年３月30日）

（雄松堂書店の以下のサイトも有益な情報がある。）

http://www.yushodo.co.jp/ypc/list_online.html　（2012年３月30日）

２．進駐軍関係

小倉市総務部企画課（編）『小倉63年小史』小倉市役所　昭和38年

岩下俊作「黒い嵐」pp. 78-93

『激動二十年－長崎県の戦後史－』毎日新聞社西部本社　昭和40年

『激動二十年－福岡県の戦後史－』毎日新聞社西部本社　昭和40年

『激動二十年－佐賀県の戦後史－』毎日新聞社西部本社　昭和40年

朝日新聞西部本社（編）『朝日新聞西部本社50年史』朝日新聞西部本社　昭和60年

呉市史編纂委員会（編）『呉市制100周年記念誌　呉の歴史』呉市役所　平成14年

皆川節夫（発行責任者）『見よ、青嵐の足立山－小倉外専卒：北九州大学卒生の占領軍での異文

化体験－』平成８年
佐々木忠「家」の履歴書144　『週刊文春』1997年８月28日号
R&R センター関係については次の３点
「奈良女性史研究会2004　Vol. 8特集『聞き書き』」奈良女性史研究会2005年
（「奈良 RR センター当時のこと」「奈良 RR センターがあった頃」）
「報告集　第10回全国女性史研究交流のつどい in 奈良」2006. 3 . 31
吉田容子「米軍施設と周辺快楽街をめぐる地域社会の反応－『奈良 RR センター』の場合－」『地理科学』65-4、2010

３．AGRS と CIU 関係
Department of Defense Form 890, 891, 892, 894については以下のサイトを参照のこと。
http://library.enlisted.info/field/manuals/series_2/FM 10-286/APPI.PDF（2012年５月13日）
埴原和郎『骨を読む　ある人類学者の体験』中公新書79　1965年
『骨はヒトを語る－死体鑑定の科学的最終手段』講談社＋α文庫　1997年
曽野綾子・古江忠雄「骨に魅せられて27年」『曽野綾子の好奇心対談』サンケイ出版1978年 pp. 23-41
Susan Sheehan, *A Missing Plane* G.P. PUTNAM'S SONS 1986
Colonel John D. Martz, Jr., Homeward Bound Quartermaster Review-May/June 1954
Graves Registration and Recovery in the Korean War
（http://www.qmfound.com/honeward_bound_korea.htm 2011年８月22日）

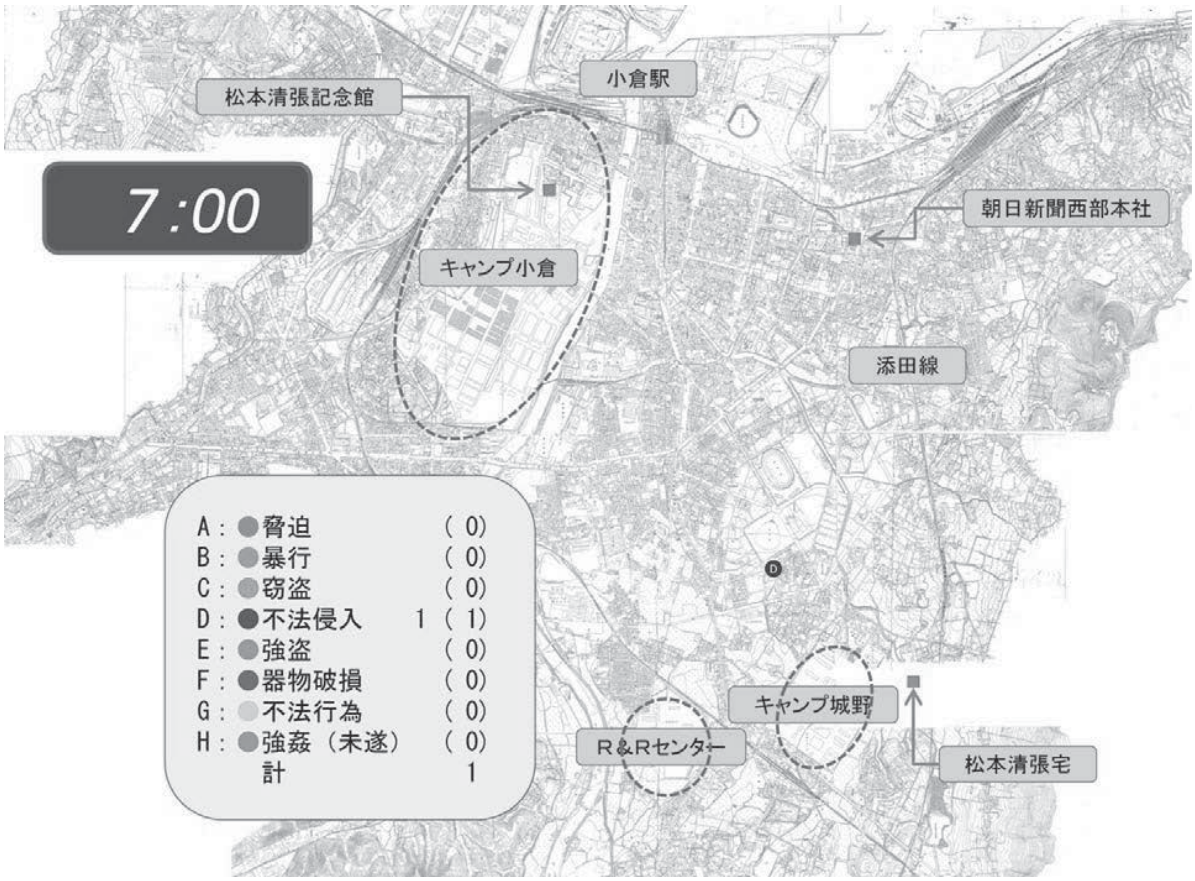
４．テレビ番組、映画
NHK 衛星第一
⑴　2003年７月20日（日）　午後10：00～12：00　BS プライムタイム
「休戦50周年　朝鮮戦争」（前編）－　北朝鮮軍とプサン攻防戦　－
「休戦50周年　朝鮮戦争」（後編）－　中国軍の介入　そして休戦　－
2001年イギリス　マリンフィルム＆TV プロダクション／クレイモスプロダクション制作
⑵　NHK 教育テレビ「知る楽　こだわり人物伝　孤高の国民作家　松本清張」
2009年11月４・11・18・25日放送
⑶　NHK BS２　「高村薫・佐木隆三　往復書簡『清張を巡る対話』」
2009年12月７日（月）午後９：00～10：30
⑷　KBS ドラマ
『ソウル1945』全71話　2006年放送
⑸　映画
『鬼軍曹ザック』（The Steel Helmet）（1950）　84分 Samuel Fuller（監督）
『トコリの橋』（The Bridge at Toko-Ri）（1955）102分 Mark Robson（監督）
『サヨナラ』（Sayonara）（1957）147分 Joshua Logan（監督）
『勝利なき戦い』（Pork Chop Hill）（1959）97分　Lewis Milestone（監督）

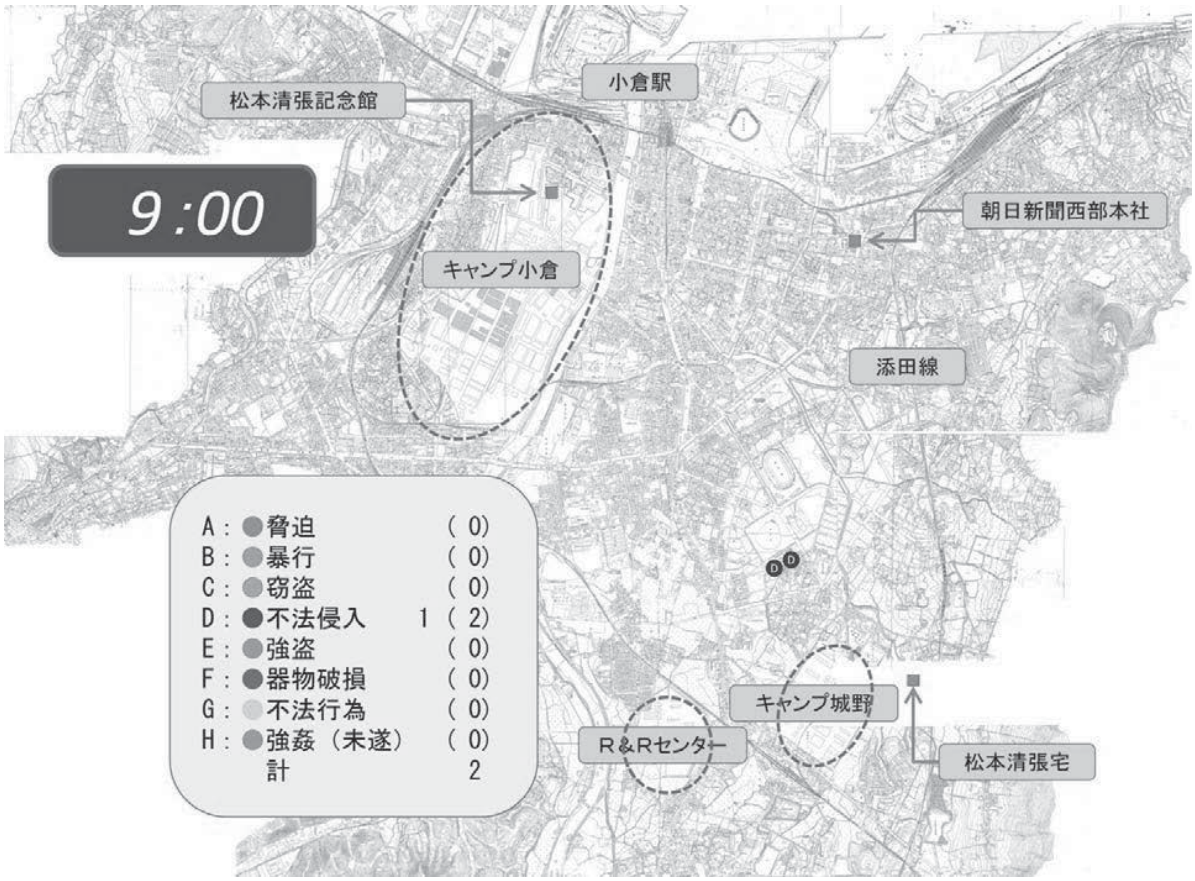
『マッシュ』（M★A★S★H）（1970）116分 Robert Altman（監督）
『ソウル奪還大作戦　大反撃』（Testimony）（1973）120分 Im Kwon Taek（監督）
『史上最大の戦場　洛東江大決戦』（Does the Nak-Don River Flow? The Battle Field）（1976）107分　Im Kwon Taek（監督）
『マッカーサー』（MacArthur, The Rebel General）（1977）129分　Joseph Sargent（監督）
『アベンコ特殊空挺部隊　奇襲大作戦』（Air Combat Abenko Green Berets）（1982）136分 Im Kwon Taek（監督）
『銀馬将軍は来なかった』（Silver Stallion）（1991）123分　Jan Kil-su（監督）
『太白山脈』（The Taebake Mountain）（1994）151分　Im Kwon Taek（監督）
『スプリング・イン・ホームタウン』（Spring in Hometown）（1999）121分　Lee Kwangmo（監督）
『JSA』（JSA: Joint Security Area）（2000）110分　Park Chan-wook（監督）
『コースト・ガード』（Coast Guard）（2001）94分　Kim Ki-duk（監督）
『ブラザーフッド』（Tae Guk Gi, Brotherhood）（2004）148分　Kang Je-gyu（監督）
『トンマッコルへようこそ』（Welcome to Dongmakgol）（2005）132分　Kwang-Hyun Park（監督）

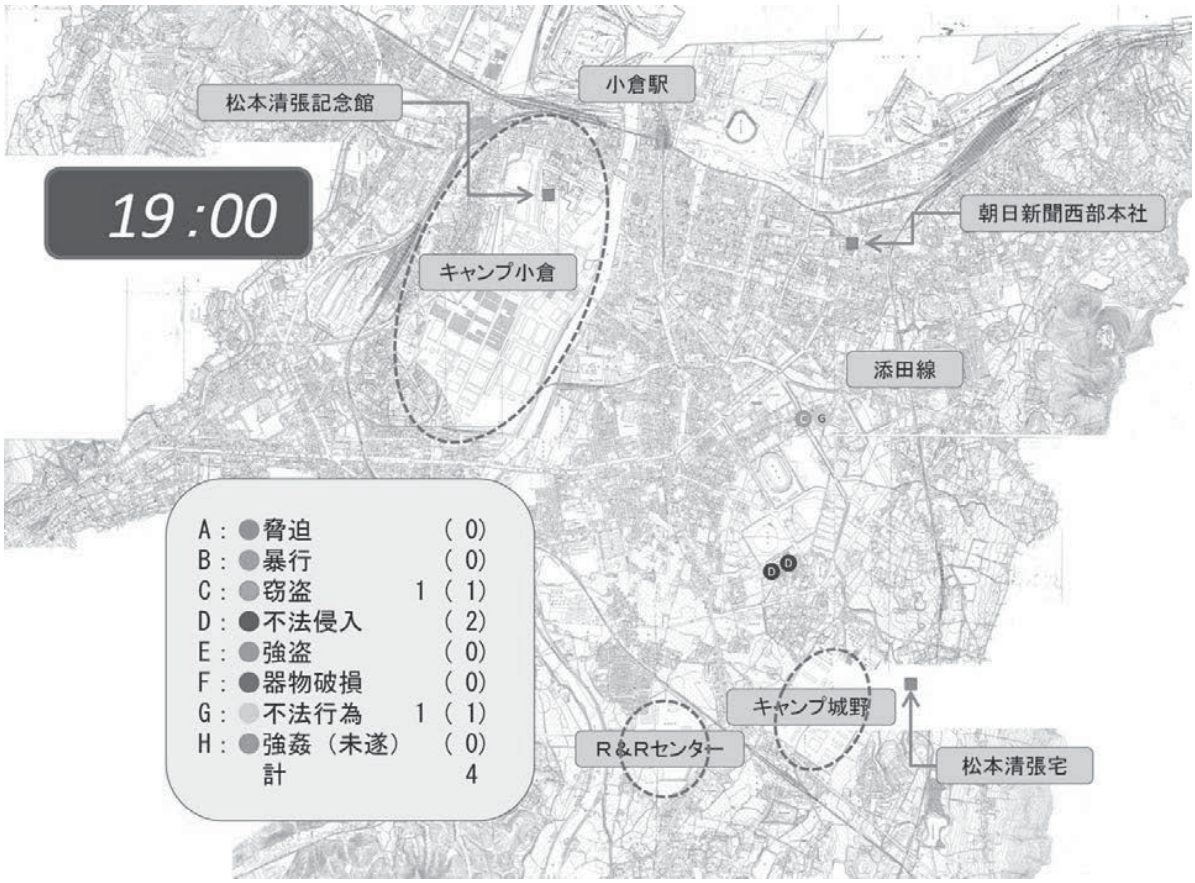
5．その他

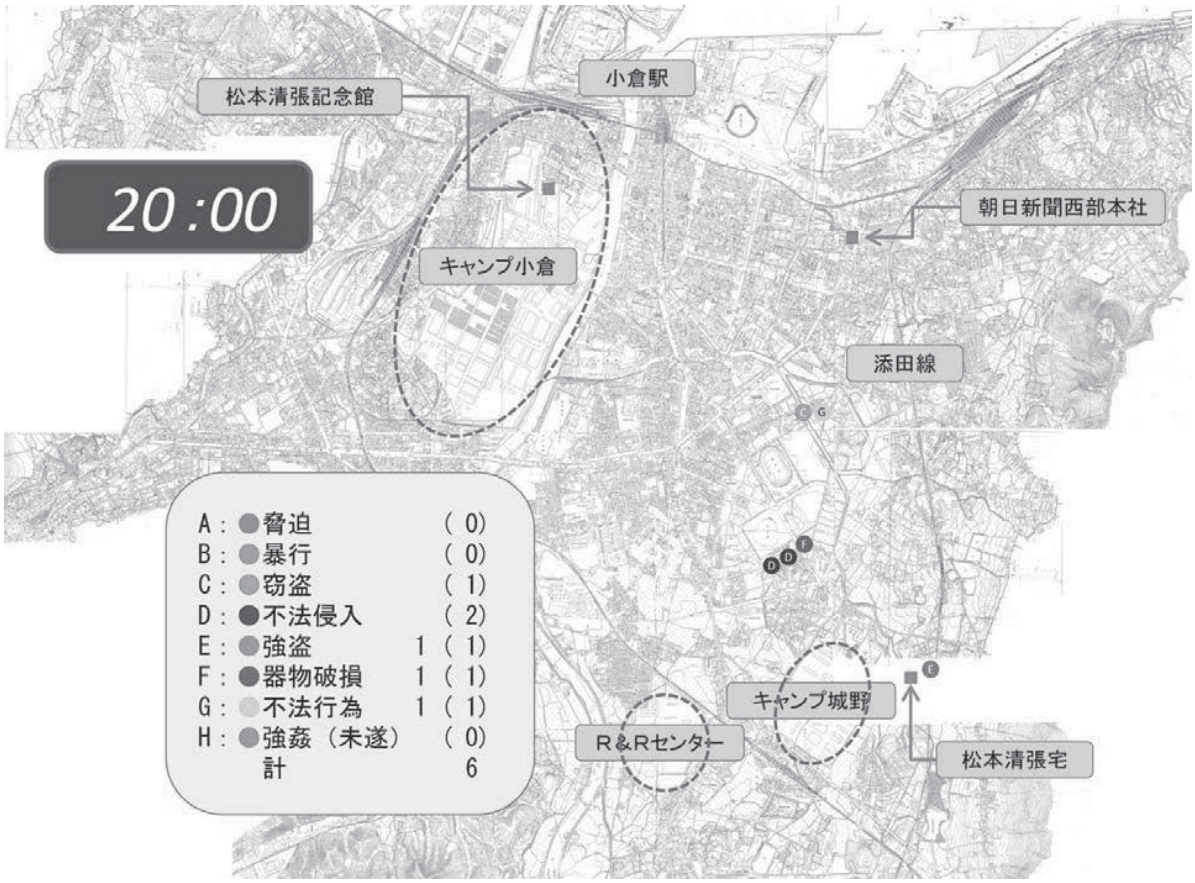
中桐正夫　「東京天文台が登場する小説「金環食（松本清張）」国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室　アーカイブ室新聞（2011年６月29日　第506号）
（http://prc.nao.ac.jp/prc_arc/arc_news/arc_news506.pdf）（2012年５月14日）
（「波の塔」は2010年６月１日　第342号で取り上げられている。）
仲本和彦『研究者のためのアメリカ国立公文書館徹底ガイド』凱風社　2008年
Vining, Elizabeth Gray *Windows for the Crown Prince* Lippincott Williams & Wilkins（1952）（『皇太子の窓』小泉一郎訳　文藝春秋社　1953年

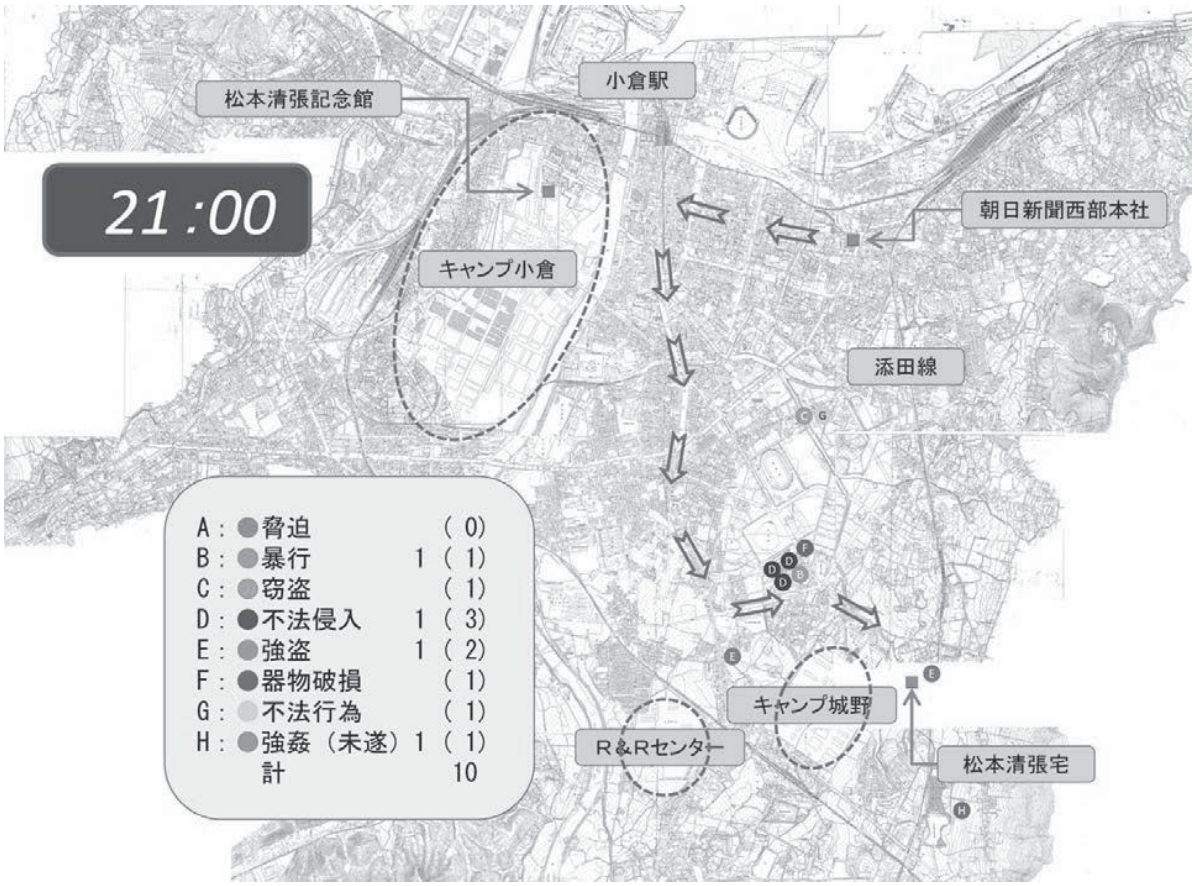
注：英文被害届の住所に基づいて事件現場の印を置いたが、この場所で事件が起こったことではない。

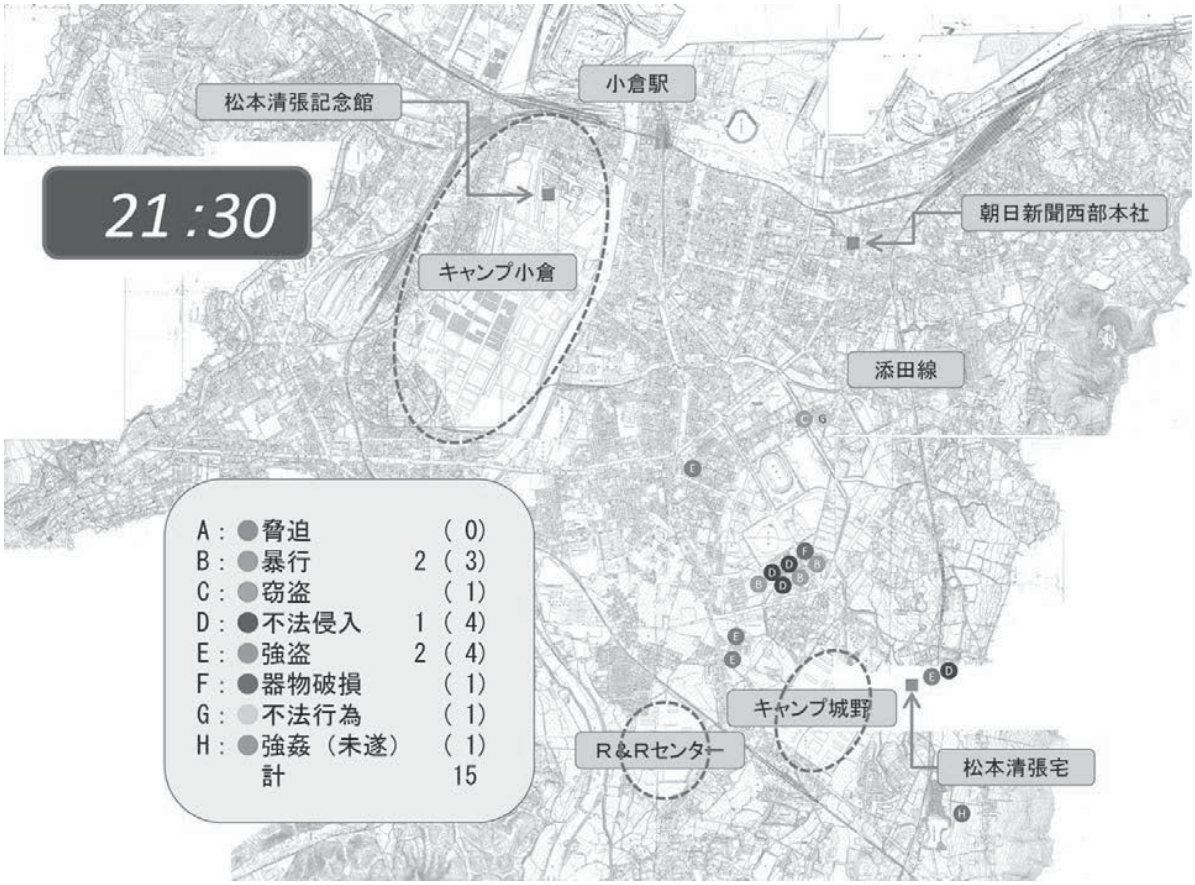




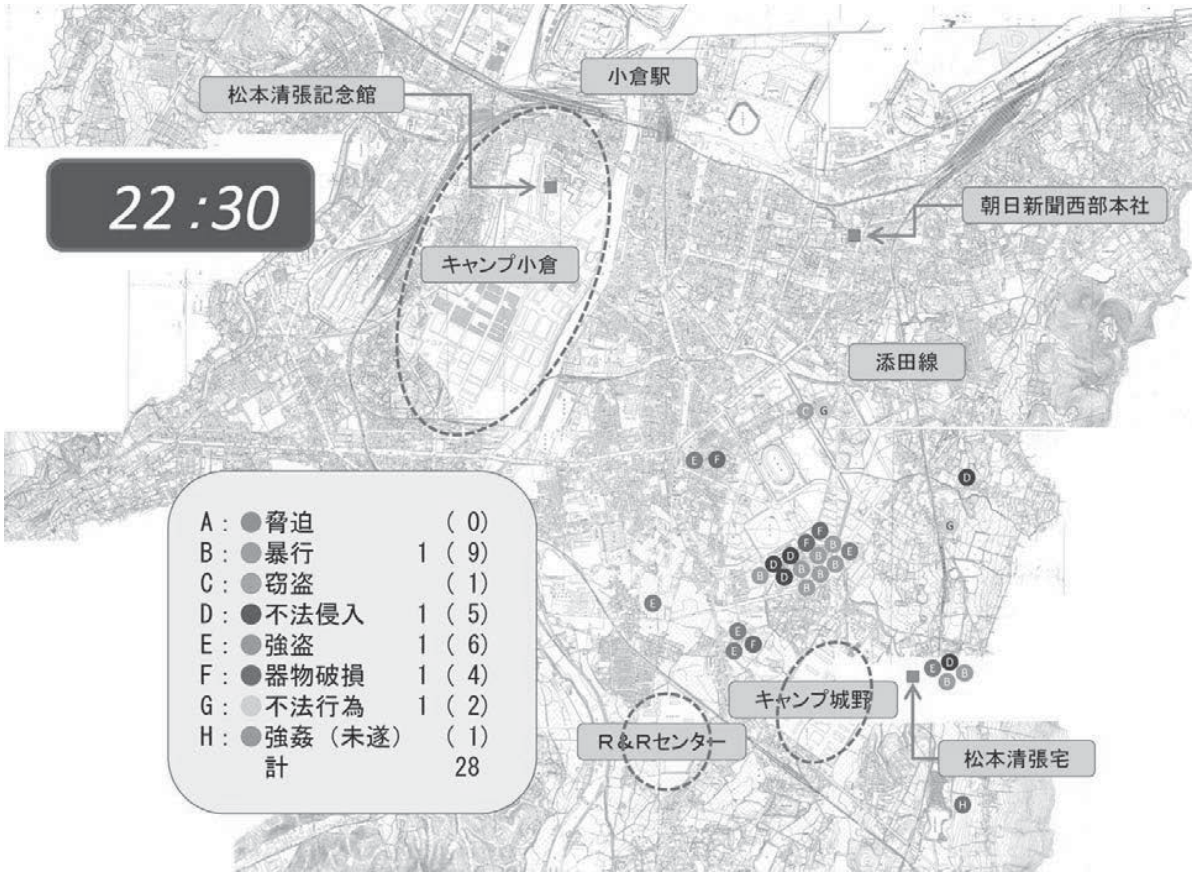

19:00
松本清張記念館
小倉駅
朝日新聞西部本社
キャンプ小倉
添田線
キャンプ城野
R&Rセンター
松本清張宅
A：●脅迫 (0)
B：●暴行 (0)
C：●窃盗 1 (1)
D：●不法侵入 (2)
E：●強盗 (0)
F：●器物破損 (0)
G：●不法行為 1 (1)
H：●強姦（未遂） (0)
計 4


20:00
松本清張記念館
小倉駅
朝日新聞西部本社
キャンプ小倉
添田線
キャンプ城野
R&Rセンター
松本清張宅
A：●脅迫 (0)
B：●暴行 (0)
C：●窃盗 (1)
D：●不法侵入 (2)
E：●強盗 1 (1)
F：●器物破損 1 (1)
G：●不法行為 1 (1)
H：●強姦（未遂） (0)
計 6

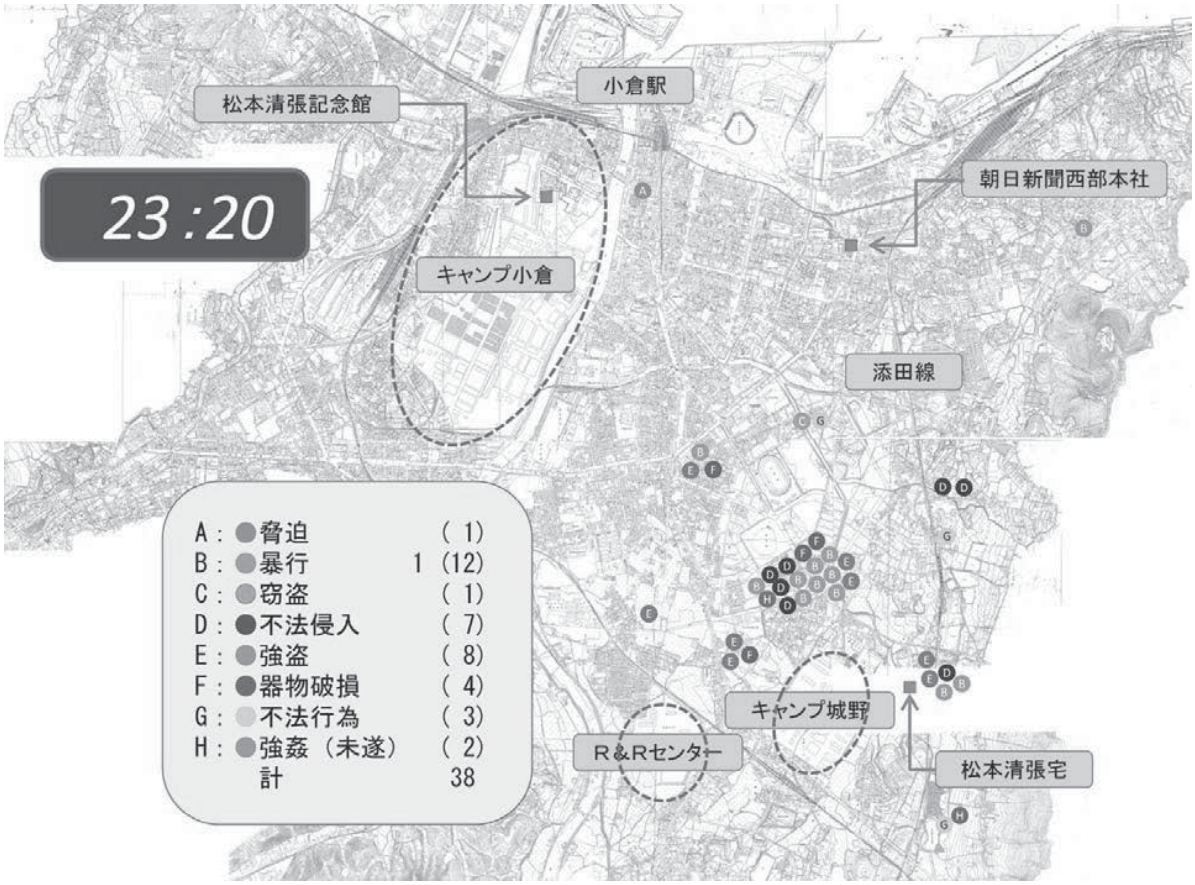

21:00
松本清張記念館
小倉駅
朝日新聞西部本社
キャンプ小倉
添田線
キャンプ城野
R&Rセンター
松本清張宅
A：●脅迫 （0）
B：●暴行 1（1）
C：●窃盗 （1）
D：●不法侵入 1（3）
E：●強盗 1（2）
F：●器物破損 （1）
G：●不法行為 （1）
H：●強姦（未遂）1（1）
計 10

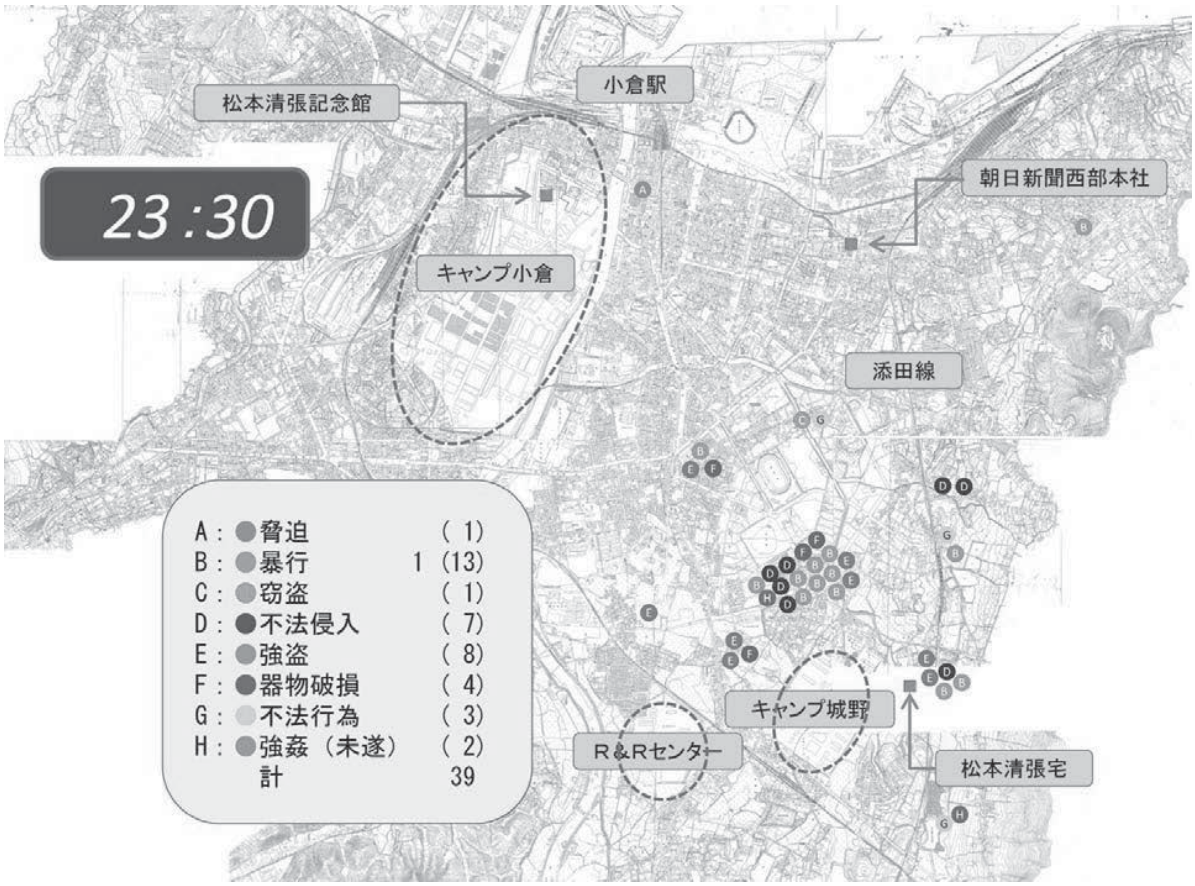

21:30
松本清張記念館
小倉駅
朝日新聞西部本社
キャンプ小倉
添田線
キャンプ城野
R&Rセンター
松本清張宅
A：●脅迫 （0）
B：●暴行 2（3）
C：●窃盗 （1）
D：●不法侵入 1（4）
E：●強盗 2（4）
F：●器物破損 （1）
G：●不法行為 （1）
H：●強姦（未遂） （1）
計 15

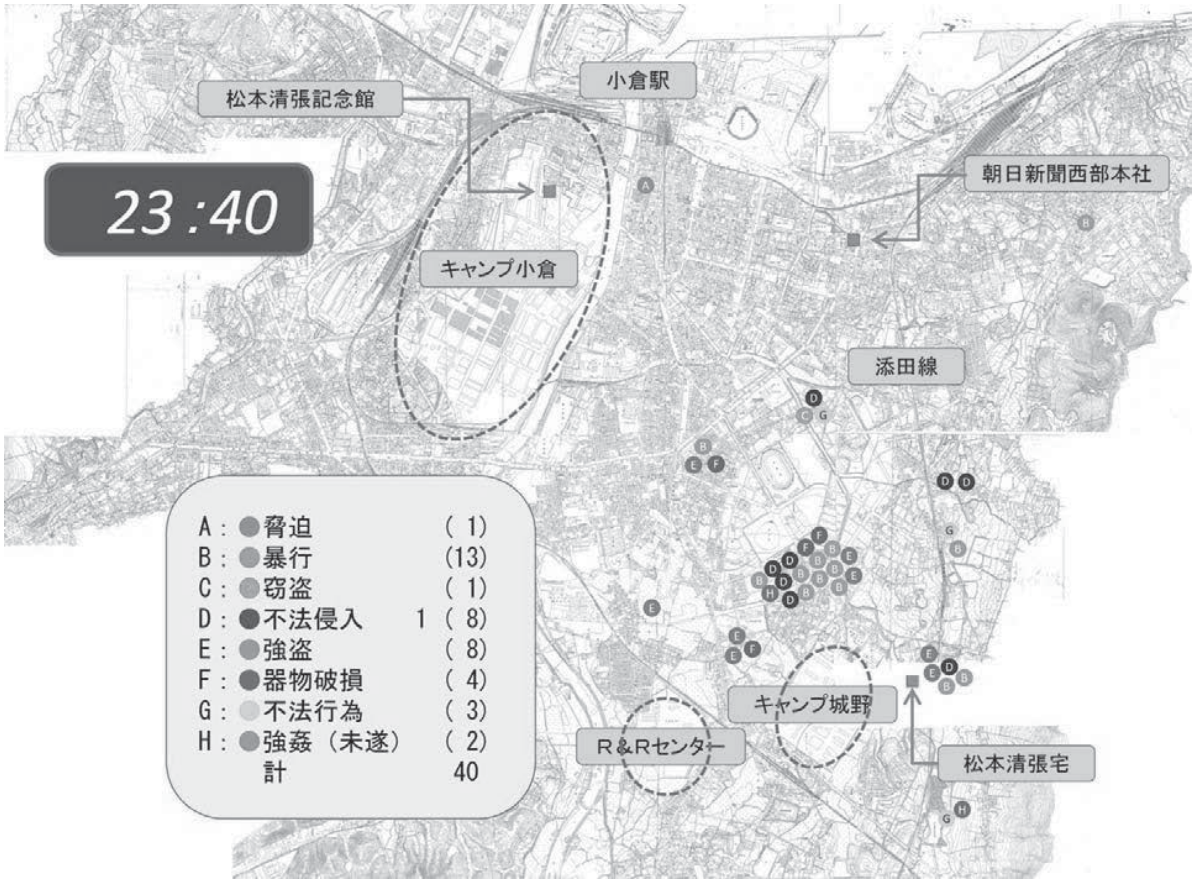
22 :00
松本清張記念館
小倉駅
朝日新聞西部本社
キャンプ小倉
添田線
キャンプ城野
R&Rセンター
松本清張宅
A : 脅迫 (0)
B : 暴行 5 (8)
C : 窃盗 (1)
D : 不法侵入 (4)
E : 強盗 1 (5)
F : 器物破損 2 (3)
G : 不法行為 (1)
H : 強姦（未遂） (1)
計 23

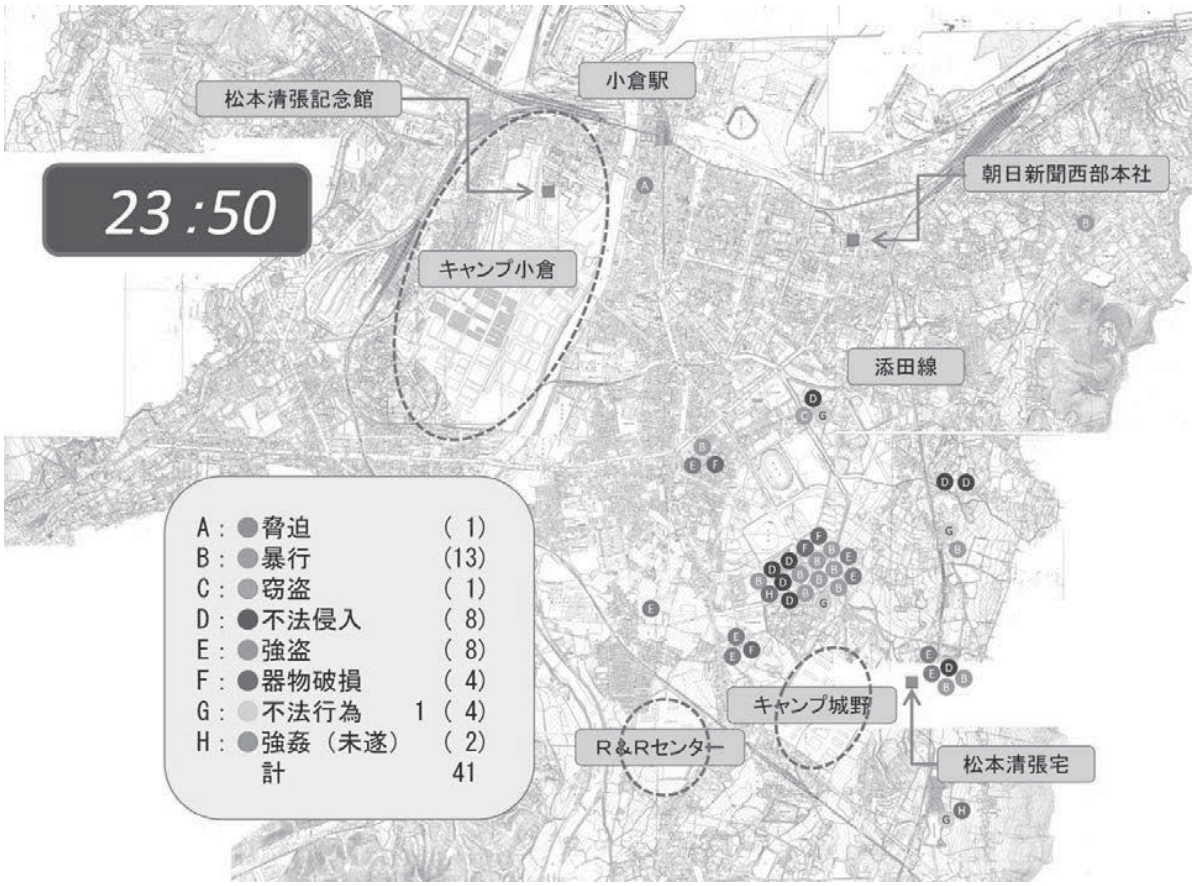

22 :30
松本清張記念館
小倉駅
朝日新聞西部本社
キャンプ小倉
添田線
キャンプ城野
R&Rセンター
松本清張宅
A : 脅迫 (0)
B : 暴行 1 (9)
C : 窃盗 (1)
D : 不法侵入 1 (5)
E : 強盗 1 (6)
F : 器物破損 1 (4)
G : 不法行為 1 (2)
H : 強姦（未遂） (1)
計 28

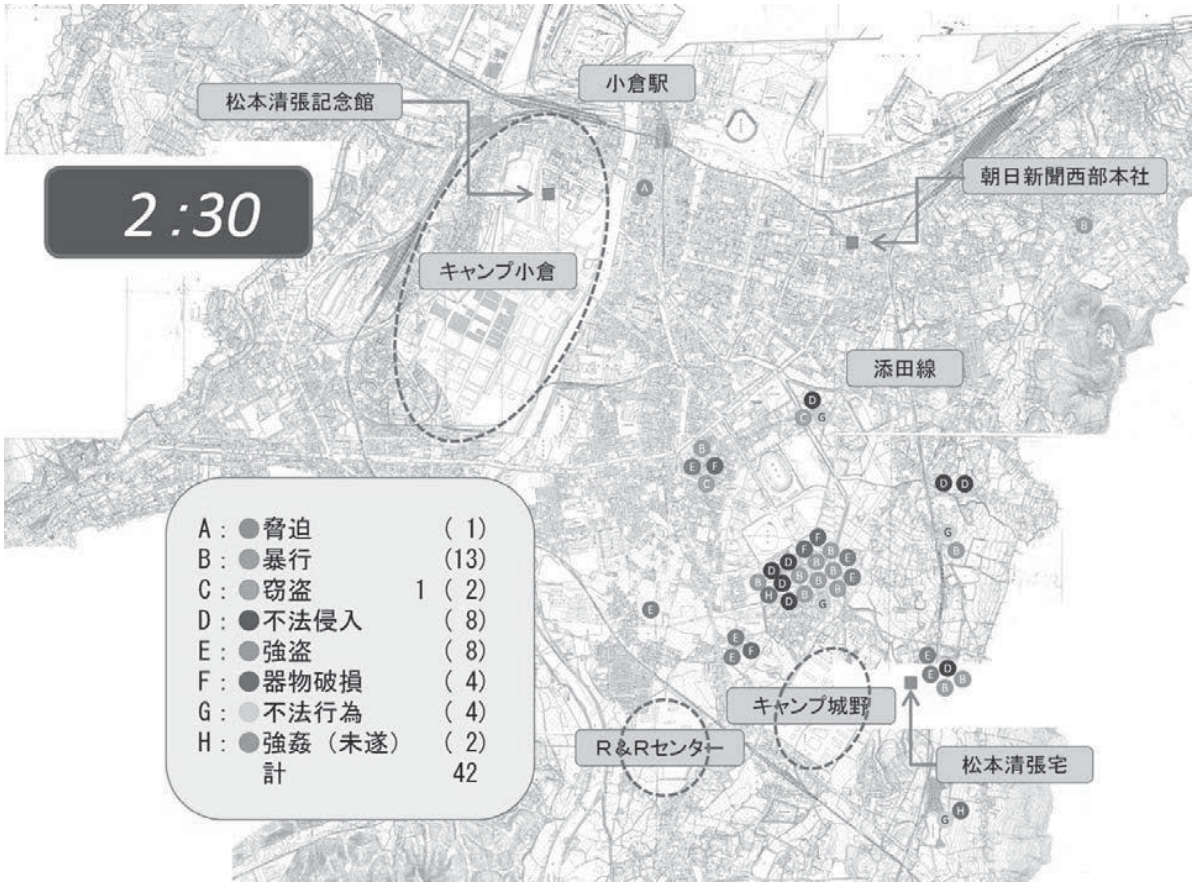
23:00
松本清張記念館
小倉駅
朝日新聞西部本社
キャンプ小倉
添田線
キャンプ城野
R&Rセンター
松本清張宅
A：●脅迫　1（1）
B：●暴行　2（11）
C：●窃盗　（1）
D：●不法侵入　2（7）
E：●強盗　2（8）
F：●器物破損　（4）
G：●不法行為　1（3）
H：●強姦（未遂）1（2）
計　37


23:20
松本清張記念館
小倉駅
朝日新聞西部本社
キャンプ小倉
添田線
キャンプ城野
R&Rセンター
松本清張宅
A：●脅迫　（1）
B：●暴行　1（12）
C：●窃盗　（1）
D：●不法侵入　（7）
E：●強盗　（8）
F：●器物破損　（4）
G：●不法行為　（3）
H：●強姦（未遂）（2）
計　38

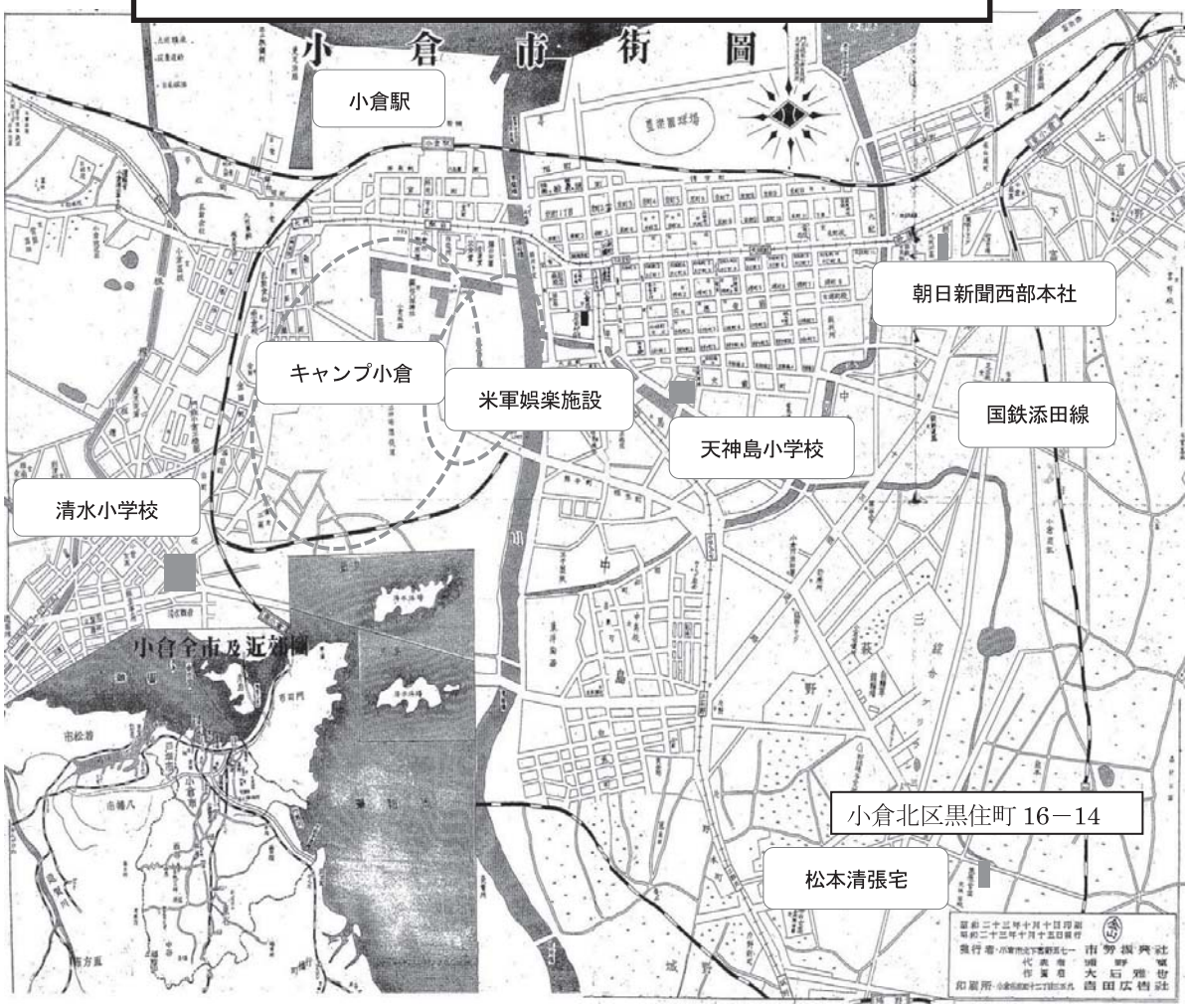

23:30
松本清張記念館
小倉駅
朝日新聞西部本社
キャンプ小倉
添田線
キャンプ城野
R&Rセンター
松本清張宅
A：●脅迫 (1)
B：●暴行 1 (13)
C：●窃盗 (1)
D：●不法侵入 (7)
E：●強盗 (8)
F：●器物破損 (4)
G：●不法行為 (3)
H：●強姦（未遂） (2)
計 39


23:40
松本清張記念館
小倉駅
朝日新聞西部本社
キャンプ小倉
添田線
キャンプ城野
R&Rセンター
松本清張宅
A：●脅迫 (1)
B：●暴行 (13)
C：●窃盗 (1)
D：●不法侵入 1 (8)
E：●強盗 (8)
F：●器物破損 (4)
G：●不法行為 (3)
H：●強姦（未遂） (2)
計 40


23:50
松本清張記念館
小倉駅
朝日新聞西部本社
キャンプ小倉
添田線
キャンプ城野
R&Rセンター
松本清張宅
A：●脅迫 (1)
B：●暴行 (13)
C：●窃盗 (1)
D：●不法侵入 (8)
E：●強盗 (8)
F：●器物破損 (4)
G：●不法行為 1 (4)
H：●強姦（未遂） (2)
計 41

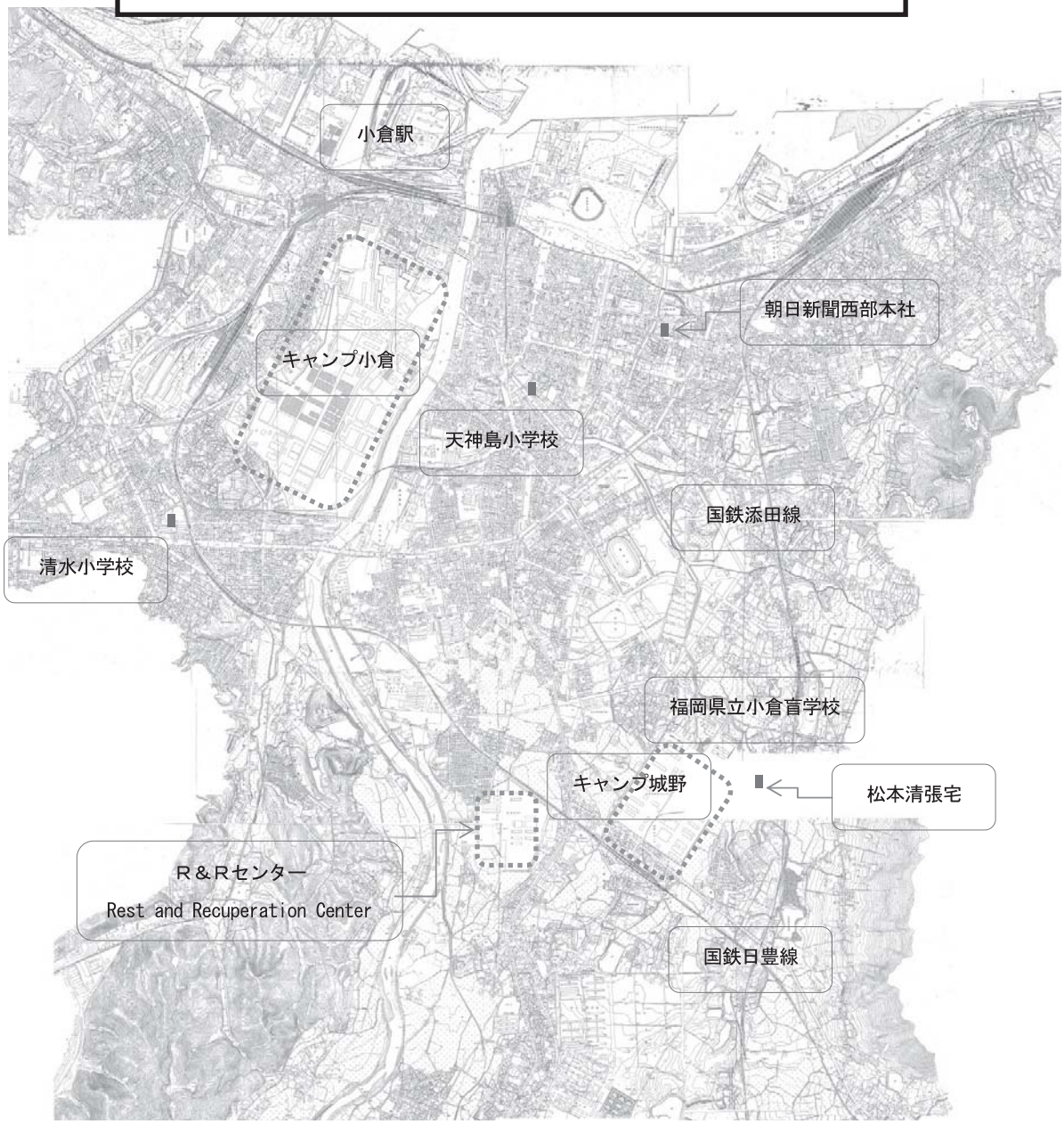

2:30
松本清張記念館
小倉駅
朝日新聞西部本社
キャンプ小倉
添田線
キャンプ城野
R&Rセンター
松本清張宅
A：●脅迫 (1)
B：●暴行 (13)
C：●窃盗 1 (2)
D：●不法侵入 (8)
E：●強盗 (8)
F：●器物破損 (4)
G：●不法行為 (4)
H：●強姦（未遂） (2)
計 42

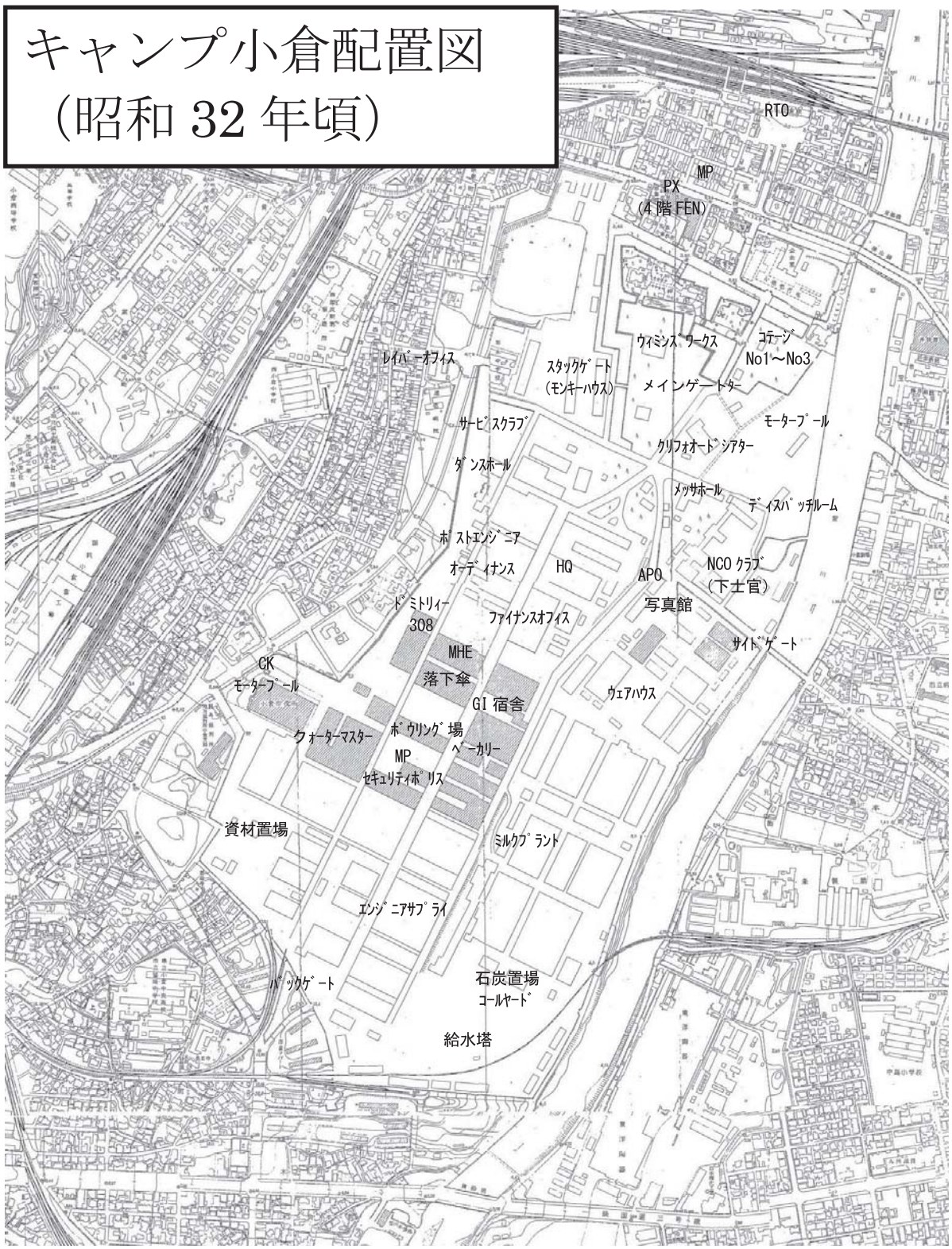
小倉市街図（昭和 23 年）


小 倉 市 街 圖
小倉駅
朝日新聞西部本社
キャンプ小倉
米軍娯楽施設
国鉄添田線
天神島小学校
清水小学校
小倉全市及近郊圖
小倉北区黒住町 16－14
松本清張宅

小倉都市計画図
小倉市街図（昭和 25 年）
小倉駅
キャンプ小倉
朝日新聞西部本社
天神島小学校
7/10 の帰宅ルート
清水小学校
メモリアル・クロス
福岡県立小倉盲学校
キャンプ城野
松本清張宅
国鉄添田線
米軍住宅

小倉市街図（昭和 28 年）


小倉駅
朝日新聞西部本社
キャンプ小倉
天神島小学校
国鉄添田線
清水小学校
福岡県立小倉盲学校
キャンプ城野
松本清張宅
Ｒ＆Ｒセンター
Rest and Recuperation Center
国鉄日豊線



永吉明さん作成

kashima@tc.nagasaki-gaigo.ac.jp